The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の呼称の歴史
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2020, 60, p. 127-183
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76054
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の呼称の歴史

田野村　忠温

1　はじめに

現在「日本語」と呼ばれる言語が歴史を通じてどう呼ばれてきたかは日本語研究に携わるすべての者にとって重要な問題のはずであるが、その真相はほぼ未知、未解明である。

日本語史の議論の文脈においては、「日本語史」や「日本語の歴史」のほか「上代日本語」「中世日本語」といった表現が自由に使われ、あたかも「日本語」という名称が古来使われていたかのような印象をも与える。しかし、「日本語」という名称の歴史は実のところ非常に浅い。ここでは、日本語の名称の歴史を可能な範囲で明らかにするとともに、考察に際して意識すべき観点や事実の精密な解明を阻む原理的な制約について述べる。[1]

また、日本語における日本語の名称の問題は、「日本語」が漢語であり、またそれゆえに、日中両語間に相互影響があった可能性があるという事実を介して、中国語における日本語の名称の問題に連続している。中国語で日本語がどう呼ばれてきたかという問題にも併せて考察を加える。

なお、論述に際しては、引用の文脈と論述上避けられない場合を除き、日本語の名称の構成要素のうち漢語は漢字で、和語は仮名で表記する。例えば、「日本語」「やまとことば」「日本くち」のように書く。名称の発音は片仮名で引用符を添えず、ニホンゴのように記す。また、日本語、中国語とも漢字は原則として現代日本の字体による。ただし、中国語で書かれた先行研究からの引用においては原文の字体に従う。

---

[1] 本稿の本文では「日本語の名称」という表現を用いるが、標題は「日本語の呼称」とした。これは、どちらの表現も“日本語を指す言語名”ではなく“何かを指す日本語名”という意味にも解し得るが、「呼称」にはそうした印象が相対的に薄いという漠たる個人的語感による。いずれにせよ、この曖昧性は文脈において容易に解消されるので、本文では平易な「名称」という表現による。

2　日本語の名称――既知と未知

日本語の名称の歴史に関わる研究は少ないが、見るべきものがいくつかある。まずそれらについて簡単に述べる。

2.1　猿田（1999）「日本列島言語の呼称をめぐって」

猿田（1999）は 9 世紀の漢文資料に現れる日本語の名称――および中国語や梵語の名称――を詳細に調査し、「倭語」「倭辞」「倭詞」「倭言」などの表現が現れること、また、「日本語」の用例も見出されることを明らかにしている。

猿田の挙げる「日本語」の用例は次の通りである。天台宗の僧侶円珍（814 ～ 891 年）の入唐日記の抄録『行歴抄』[2] の一節であり、同じく同宗僧侶として 15 年早く入唐していた円載（生年不詳 [3] ～ 877 年）との再会の場面の記述である。ここでの「（中略）」は猿田による。

> 騎馬来到橋南頭、下馬下笠。正是留学円載幷也。珍便出門、迎接橋北、相看礼拝、流涙相喜。珍雖如此、載不多悦。顔色黒漆、内情不暢。珍却念多々奇々。（中略）説道我在唐国、已経多年、総忘却日本語云々。（円珍『行歴抄』、仁寿 3（853）年 12 月 14 日の条）

この「日本語」の用例については後に再び取り上げ、日本語の名称の歴史におけるその意味合いを検討する。

2.2　古田（1969）「『国語』という語」他

古田（1969, 1994, 1998）は主として 19 世紀における「国語」および「くにことば」などの語の使用状況に関する詳細な調査と考察である。

古田は、「国語」と「くにことば」が本来“一国の言語”という意味を表していた――文脈中に既出の国名を受けて「その国語」と言うことで当該国の言語を指すことができた――

---

[2]『行歴抄』は円珍の 851 年から 858 年にかけての入唐旅行の日記の抄録であるが、その伝存の過程は不詳である。橋本（1933）によれば、『行歴抄』は跋文からそれが 1049（永承 4）年に頼覚が実相房にあった『行歴記』3 巻の一部を書写したものであることは分かるが、その実相房がどこの寺のものなのかも、頼覚が『行歴記』を抄出したのかそれとも実相本がすでに抄出本だったのかも分からない。野本（1986）は、『行歴抄』は「敬光（一七四〇－九五）の『智証録』中の現在失本『在唐巡礼記』五巻の抄出本らしい」とする。総合仏教大辞典編集委員会編（1987）は、『行歴抄』は「当時の日中仏教交渉史を知る好資料であるが、偽書とみる説もある」とする。

『行歴抄』の読みは文献によってギョウリャクショウ、ギョウレキショウ、アンレキショウと一定しない。

[3] 馬淵（1957）の推定によれば生年は 804 ～ 809 年ごろ。

が、その後それがもっぱら日本語を指すのに使われるようになるなど、意味、用法上の変化をこうむったことを明らかにしている。

ただし、本稿の関心とは異なり、古田の考察の主題は「国語」という近代語の成立と変遷である。そのことは各論文の題目が示す通りであるが、実際本文においても観察の対象はほぼ「国語」「くにことば」などの特定の表現に限られている。本稿で解明を目指すのは、日本語を表す言語名全般の長期的な歴史である。そして、「国語」の類の語は通常の言語名と性質を異にするのでここでは考察の対象から外す（後述）。

2.3　京極（1986）「『国語』『邦語』『日本語』について」

京極（1986）は、標題に示された3語の18世紀後半から19世紀にかけての使用状況に関する詳細な調査と考察である。古田の一連の考察に似るが、京極は「日本語」という名称も観察の対象に含めている。

京極はまた「日本（の）ことば」「日本（の）くち」などの表現があったことにも触れ、しかし、それらは「日本語の呼称というよりも説明的言い方と見るべきものであろう」と述べている。これについては後に検討する。

2.4　日本語の名称の歴史に関する理解の現状

結局、日本語の名称の全体的な歴史は完全に未解明であることになる。未解明と言うより、そもそも日本語の名称の歴史が解明を要する問題として意識されることがほとんどなかったということであろう。日本語研究の学界における日本語の名称の歴史に対する無関心を猿田（1999）は次のように指摘している。

> 日本語及びその研究の軌跡・展開を扱う「日本語史」（国語史）や「日本語学史」（国語学史）において、研究対象である日本語（国語）の呼称の史的言及は十分になされていない憾みがあった。

そして、この無関心はやはり、大多数の研究者に日本語の名称の歴史的な多様性と変遷に関する認識がなかったことによるものであろう。もしそれがあれば、日本語史の重要な問題の1つとしておのずと探求が始まったはずだからである。しかし現実には、猿田（1999）による9世紀の状況の調査と京極（1986）による近代における「日本語」の調査のほかには、古田（1969）――および次に触れるかめい（1970）――以来、「国語」という語の成立と展開の問題が一部の日本語研究者の関心を集めただけであった。

2.5　かめい（1970）「『こくご』とはいかなることばなりや」

かめい（1970）はその標題が示す通り「国語」という語に関する考察であるが、その中で「日本語」の名称にも触れている。しかし、想像に頼ったその所論には二重の意味で無理がある。「日本語」の歴史に関わる数少ない発言の1つであるので、本論に入る前にここでその問題を確認しておく。

まず、かめいは「日本語」という名称の使用開始の時期について、

> ニホンゴ（ないしニッポンゴ）というかたちのもちいられるようになったのは、もとより明治以後のことである。

と述べている。しかし、その判断の根拠は示されておらず、実際には後に見る通り「日本語」の使用開始は幕末の開国期以前にさかのぼる。ちなみに、猿田（1999）の記述を素直に受け止めれば「日本語」は幕末どころか9世紀から使われてきたということになるが、問題はそれほど単純ではない。これについては後に慎重に検討する。

また、かめいは「日本語」の成立背景を次のように説明している。「日本のことば」という表現の用例――『キリシタン版平家物語』の扉、『和英語林集成』、福沢諭吉の著作その他における「Nifon no cotoba」「日本ノ言葉」「日本ノ話」「日本ノ語」などの表記の例――の引用は省いて引用する。

> 漢字をどうあてるにせよ、とにかく「にほんのことば」というかたちはあった。（中略）一般の風潮からいえば漢語ずきの、すなわちまた漢語化ずきの日本人として、また漢語がなかんずくどっと社会にあふれだした明治初年のこととして、「にほんのことば」をぎゃくに漢語化すれば、つまり、漢字にうつして字音でよめば「ニホンゴ」というかたちもこのかぎりでは容易につくりだしえたとかんがえられる。しかし支配層一般の“日本語”に対する意識は「国語」をこのむ方向へ傾斜していた――、現実のうごきはじじつそうであった。

「国語」の成立を主題とした議論であることから目下の関心には関わらない要素を併せ含み、かつ、説明が不足気味であるが、要するに、“「日本語」という名称以前に、日本語を表す「日本のことば」という言い方があり、「日本の語」と書かれることもあった、そして、明治初年における漢語流行の風潮の中でその「日本の語」を漢語化することによって「日本語」は作られた”ということであろう。

しかし、「日本語」が「日本の語（ことば）」を漢語化したものだとする見方は、漢語流行の事実を

頼りに、日本語の名称のことだけを考えて編み出された想像に過ぎない。筆者の調査と推定によれば、18 世紀のうちに国名に「語（ご）」を加えて当該国の言語を表す慣習ができ、そして、19 世紀中葉にそれが社会に普及した（後述）。幕末にあっては、「日本語」という名称は「日本の語（ことば）」からの漢語化という迂遠な過程を想定するまでもなく、「国名＋語（ご）」という形の複合語として直接に作り出せるものであった。

3　日本語の名称の歴史の概略と考察の対象

ここではまず日本語の名称の歴史のあらましを確認し、次節以下における考察の対象の範囲を定める。

3.1　日本語の名称の歴史の概略

各時代における日本語の名称の使用状況は稿末の日本語名称年表に示した通りであるが、それをごく粗く単純化して示せば表 1 のようになる。ここでは、名称間の使用頻度の差、すなわち、重要度の差は捨象している。また、日本語名称年表では個別に注記している通り、早い時期における漢語の名称の用例には漢文の文脈におけるものが多い。

表 1　日本語の名称の歴史の概略

時期	日本語の名称
9世紀～16世紀	倭言、倭語、倭詞、和言、日本語、 和国のことば、やまとことば
17世紀～19世紀前半	倭言、倭語、和語、 日本のことば、日本ことば、日本くち、やまとことば
19世紀後半	日本の語、日本語、和語、 日本のことば、日本ことば、やまとことば
20世紀以後	日本語

時期の便宜的な区分は大まかに鎖国、開国、20 世紀の開始を境界としている。このような不満足な整理を足がかりとし、日本語の名称の歴史に関するより適切な理解に至るためのさまざまな観点や課題を次節（4 節）でまず述べる。

現在通用している「日本語」という名称の確実に語り得る歴史は 19 世紀半ばに始まる。“では、それ以前には日本語はどう呼ばれていたのか”、あるいは、“猿田の指摘によれば「日本語」の名称は 9 世紀にすでにあったのではないのか”、そういった疑問に関する私見は追って明らかにする。

3.2　考察の対象の範囲

「国語」という語、および、類義の「邦語」「くにことば」「みくにことば」についてはここでは考察の対象から外す。それらの語は表１にも含めていない。

その措置の主たる理由は、「国語」その他の語は一般の言語名とは異質であることにある。すなわち、「国語」は日本の文脈で使われれば日本語という特定の言語を指すという意味で言語名のような面も持つが、複合語の前要素「国（こく）」が固有名詞ではなく普通名詞的であり、文脈に依存せず直接に特定の言語を指す諸名称とは一線を画している。自国の言語を表す用法における「国語」は「我が国の国語」「我が国語」といった表現から「我が国の」「我が」を省いたものとして理解することができ、自国の文脈における使用を前提とする。「市庁」という語がＡ市の文脈で使われればＡ市庁を指し、「社員」という語がＢ社の文脈で使われればＢ社の従業員を指すように、「市庁」「社員」の指示対象が文脈に依存して決まるのと同じことである。

「国語」その他を言語名に含めるかどうかは所詮言語名の定義の問題であるが、いずれにせよ古田（1969）以来の研究の蓄積にここで付け加えるべき新たな知見もないという事情もあるので、以下の議論からは省き、日本語名称年表への記載も少数にとどめる。

4　予備的考察

日本語の名称の歴史の考察に際しては注意すべきことがいくつもある。まずここで考察の観点や課題を中心に述べる。

4.1　視野拡大の必要性

まず、日本語の名称の歴史の問題はそれを含むより広い文脈の中に位置付けて考察することが可能であり、また、必要でもある。

それは第１に、言語名全般の歴史という文脈である。日本語を表す名称と他言語を表す名称とのあいだに存在する共通性は日本語の名称の歴史を考えるうえで重要な手がかりとなる。

日本語における言語名は基本的に固有名詞を前要素、普通名詞を後要素とする複合語であり、日本語の諸名称も例外ではない。したがって、例えば「日本語」という名称を、「語」を後要素とする他言語の名称から切り離して考えたのでは満足な理解は得られない。このことにはすでに少し触れた（2.5）。また、日本語にとって特に関わりの深い外国語である中国語と英語を表す名称を調べてみると、過去にはいずれも多くの名称があったが、その多様性が淘汰によって失われ、最終的に統一が実現したことが確かめられる（拙論（2018a, 2018b））。日本語の名称もそうした点に関して中国語と英語の名称と平行的な歴史をたどっ

た。

第 2 に、視野をさらに日中両語における言語名の歴史という文脈に広げて考察する価値もある。

「倭語」や「日本語」などの名称を構成する「倭」「日本」「語」が漢語であるのみならず、9 世紀の漢文資料に現れる「倭語」などの名称は中国語からの借用か少なくともその表現法に従ったものであろうし、近現代においても言語名に関して両語間に相互影響があった可能性がある。また、言語名の淘汰の現象は中国語にも同様に認められる。

以上のような理由で、日本語における日本語の名称の歴史の理解のためには他言語を表す名称や中国語における言語名にも目を向ける必要がある。日本語における日本語の名称だけについて考えるという狭い問題意識では見えてくることが限られる。

4.2　言語名の特質と歴史

日本語の名称の歴史を明らかにするにはまず過去における名称の使用状況を確かめる必要があるわけであるが、どのような資料を探せば日本語の名称の用例が見つかるのだろうか。

その問いへの答えを知るには、まず言語名というものの特質を考える必要がある。すなわち、言語名はそもそも他言語との接触、ないし、他言語との対比の意識を前提として初めて必要となるものである。日本語だけの世界に暮らしていれば、日本語を表す名称は要らない（拙論（2018a））。言語名の歴史は、そうした意味において、古来社会の状況を問わず常に存在したはずの語彙――例えば、身体部位や基本動作を表す語彙――の歴史とは本質的に異なる。

そのように考えれば、遠い過去に関しては日本語がどのような名称で呼ばれていたのかという問いがほとんど意味を成さないことが分かる。古くは名称がなかったであろうし、名称が生まれてからもそれを使う人の範囲は局限されていたはずである。日本語の名称は外国や外国語に関する情報の流通の増加を待って初めて社会に普及したと考えられる。日本語が古来ニホンゴと呼び続けられてきたわけでもなければ、歴史を通じて時代ごとに決まった名称があったということでもないのである。

4.3　用例の出現文脈

上記のような言語名の特質から考えて、日本語の名称の出現が比較的高い確率で見込まれる過去の資料は限られることになる。遣唐使廃止後開国までの期間にはおそらく次のような資料群しかない。

1）漂流、漂着、探検に関わる記録

2）蘭学資料（辞書、文法書、翻訳書）
3）英語などの語学書（辞書、学習書）
4）条約や関連の文書

このうち2以下については特に説明を要しないであろうが、1の代表的な資料としては林復斎らの編纂による『通航一覧』全350巻（1853（嘉永6）年ごろ完成）がある。『通航一覧』は箭内（1988）によれば「幕末期江戸幕府によって編修された対外交渉関係の資料集成」であり、その編纂は「異国船来往の対外危機に対処するためのきわめて時局性の強い修史事業」であった。そこには1566（永禄9）年から1825（文政8）年に至るまでの異国との交渉に関する史料が包括的に収められ、来航した外国人や他国に漂流後送還されて帰国した日本人に対する尋問の記録を多数含む。そして、そうした記録には異国民どうしの接触において不可避的に生じる言語上の問題に関わる記述がしばしば現れる。『通航一覧』にはその続編として、林鶯渓（おうけい）らの編纂による『通航一覧続輯』全152巻（1856（安政3）年完成）がある。

日本語の名称の歴史の考察は、上記のような資料群を中心とする調査を通して探る作業になる。

4.4　言語名同定の障害

しかし、用例の調査を始めるとたちまち深刻な困難に直面する。それは、名称の用例が見つかってもその名称が何であるのかが分からないという問題である。

あえて逆説的に表現したが、過去の資料中に漢字で表記された日本語の名称はその読みが示されていなければ確実に読むことができないということである。例えば、「日本語」と書かれた表現の用例の読みはニホンゴであったかも知れないが、ニホンコトバであったかも知れない。また、ヤマトコトバでなかったとも限らない。

漢字表記の言語名の読みを不確定にする最大の要素は、名称を構成する各要素が和語でも漢語でもあり得るという事実である。日本語の名称の用例に含まれる「日本」がニホンなのかヤマトなのか、「倭」「和」がワなのかヤマトなのか、「語」がゴなのかコトバなのか、「言語」がゲンゴなのかコトバなのか分からない。加えて、漢字音に関わる不確定性もある。「日本」はニホン、ニッポンの2通り、「言語」はゴンゴ、ゲンギョ、ゲンゴの3通りに読める。

そのため、「和語」の用例はワゴともヤマトコトバとも読めることになり[4]、「日本語」の用例はニホンゴ、ニッポンゴ、ニホンコトバ、ニッポンコトバ、ヤマトコトバなどさまざまに読み得ることになる。「日本語」の「語」がギョと読まれたと分かる事例は確認できていな

4 本稿では考察の対象としない「国語」の用例がコクゴともクニコトバとも読める問題については古田（1969, 1994, 1998）に詳しい議論がある。

いが、そのような読みがなかったと断定することもできない。

そうした条件下において我々に行えるのは、高々語種の和漢の別を状況に頼って推定することだけである。その結果、ニホンゴという名称の（近現代における）初出年を特定することも残念ながらできないことになる。

漢字音の読みについては推定の手がかりも乏しく、「日本」の読みがニホンかニッポンかといった問題は解決を放棄せざるを得ない。場合によっては書き手においても特定の読みが明確に意識されていなかったとか、書き手の念頭にあった読みには一致しない振り仮名が編集者によって加えられたといった事態も考えられ、用例ごとに読みを一意的に確定できるものであるとも限らない。以後、引用の文脈を除き、漢語としての「日本」の読みはニホン、「語」の読みはゴとして一律に扱う。

過去の資料中に漢字で表記された語句の読みは現代語の知識や感覚では分からない。筆者が過去の研究で気付いた、外国語の名称に関わる実例を 2 つ挙げれば、横山保三訳『魯敏遜（ロビンソン）漂行紀略』（1857（安政 4）年）に出て来る「英吉利語」に添えられた読みはイギリスゴではなくイギリスコトバであり（拙論（2018a））、清朝期に日本で中国語を表すのに使われた「清語」という名称の読みは現代的には迷う余地なくシンゴであるが、当時はセイゴとも読まれた（拙論（2018b））。日本語の名称にも関わる、今では考えられない振り仮名の例を次に示す。これは、英語の入門書の巻末に置かれた索引兼和英辞典――「索引 和英字引」と題されている――の冒頭に添えられた解説である。以後、用例の引用に際しては句読点の追加を中心とする調整を施すことがある。

> 此字引ハ日本語（ゴ）ヲ以テ英語ヲ引ク者ニシテ、伊呂波順ニ言語（コトバ）ヲ列記シアリ。其目的ハ、（一）ハ学者（マナブモノ）ヲシテ日本語ニアタル英語ヲ知ルヲ得セシメンガタメ、又、（一）ハ何事ニモアレ言ント欲スル事アル時ニ其言ントスル所ノ英語ヲ此篇ノ中（ウチ）ニ捜索シ得セシメンガ為ナリ。　（高橋五郎『正則対話活用自在 英米語学独案内』、1886（明治 19）年）

ここで下線を付した「日本語」は現在と同じくニホンゴと読まれているが、「語」だけにゴの読みが示されているのは、おそらくニホンコトバと読まれるのを防ぐためであろう。また、「言語」がここではコトバと読まれ、単語ないし語句の意味に使われている。

以上のような事情から、「日本語（にほんご）」の名称が普及する前の時代の資料に「日本語」という表現が見出されたとしても、それをニホンゴの用例と即断することはできないことになる。京極（1986）は「『日本語』の用例は近世には極めて乏しい」としたうえで“用例”を 15 件挙げている。その最も古いものは次の通りである。

（57）和蘭語ヲ日本語ニ翻訳スルニハ各形状アル者ハ其形状ニヨリテ其名義ヲ識ルト雖トモ（本木良永「和解例言」寛政二年成注8）

（中略）【（58）以下には1866（慶応2）年から1887（明治20）年にかけての“用例”14件が挙げられている。（引用者注）】

注8　片桐一男「阿蘭陀通詞の研究」（昭和六十年）五〇一頁による。

京極は、「注8」に記された片桐（1985）における断片的な引用を見て、そこに含まれる「日本語」をニホンゴと受け止めたものと見られる。片桐の用例年の誤りと誤写による異表記がそのまま引き継がれており、京極が資料を見ていないことは確実である。

出典の本木良永（よしなが）「和解例言」は、本木によるオランダの天文書の翻訳『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』[5]（1792（寛政4）年）の末尾に添えられた、翻訳方針などの解説である。長崎歴史文化博物館蔵の訳稿[6]には随所に朱筆による修正の書き込みがある。[7] それによれば、（57）の「和蘭語」はもとの訳文の通りであるが、「日本語」は当初の「日本言語」を修正したものであった。そして、当該の文脈では、ほかにも「言語」や「言葉」の一部が「語」に変更されている。状況は少々複雑であるが、もとの訳文の「日本言語」、修正後の「日本語」ともにニホンコトバであったのではないかと筆者は想像する。「和蘭語」は後述の事情からおそらくオランダゴであったと思われるが、オランダコトバではなかったと言い切れるわけでもない。

京極の挙げる（57）の例とそれに続く（58）のあいだには62年もの時間差があり、それ

---

5 原著の複合的な書名に区切りを入れずに訳しているために長く分かりにくい題名になっているが、太陽系天文学の解説と新作天地球儀の用法説明という2つの要素から成る。

6 訳稿は2冊に分けて綴じられており、題箋の表示は「太陽窮理了解説 上」「太陽窮理了解説 下」である。上が翻訳、下が「和解例言」で、各冊の扉には「太陽窮理了解説 和解草稿」「星術本原太陽窮理新制了解天地二球用法記 和解例言 草稿」と記されている。

翻訳は途中で終わる。桑木（1926）は、「上巻本文の『章』の数足らず、或は上中下三巻の中、中巻が散逸せるものか」と述べている。その後、清書本らしきものを発見した板沢（1941）の記述を考え併せると、オランダの天文書の翻訳は7巻から成り――長崎本の上巻はその第1冊に相当――、そのあとに「和解例言」の1巻――長崎本の下巻――が添えられていたものと見られる。

早稲田大学古典籍総合データベース（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/）で画像が公開されている写本はそのほぼ全体を含むが、「和解例言」は長崎本の内容の途中で終わり、目下着目している「日本語」の用例に関わる箇所を含まない。

7 修正は本木以外の人物によると見られる。オランダ語の語句の音訳をしばしば、本木の定めた基準に従わない漢字を用いて書き換えているからである。例えば、「箇百耳尼久数」という人名の音訳は「骨百耳尼詰由数」に変更されている。本木が「和解例言」に掲げたオランダ語音と音訳漢字の詳細な対応表には「KO 箇」「KU 久」とあり、変更はそれを無視して行われている。

ちなみに、修正後の訳文にはそのような事例が多く、本木が音訳の基準を定めた意味が分からない状態になってしまっている。早稲田大学蔵の写本も三枝博音編『日本哲学全書』第8巻（第一書房、1936年）所収の翻字版も修正後の訳文である。

に対し、(58) 以下の 14 例全体の時間幅は 34 年であることも注意に値する。[8] もし (57) の「日本語」がニホンゴだったとすれば、現在確かめ得る確実なニホンゴの初出例に大幅に先行する用例であることになる。

結局、本木の「和解例言」に現れる「日本語」は、それがニホンゴであった可能性も排除できないにせよ、ニホンゴであったと積極的に判断することもむずかしいことになる。この「日本語」の例にはすぐ下で別の観点から再び触れる。

4.5　言語名の二義性

言語名は一般に 2 通りの意味、用法を持つ。すなわち、「英語の本」「英語を学ぶ」などと言うときの「英語」は言語を指すが、「philosophy という英語」「空所に適切な英語を入れよ」「この英語は間違っている」などというときの「英語」は語句や文を指す（拙論（2018a, 2018b））。

この両用は言語名の使用時に無意識的に行われており、両義は融通無碍の関係にある。しかし、だからと言って、それらが単なる意味、用法の文脈的な変容にとどまると考えてよいわけではない。そのことは、歴史の中で両義性を失った例外的な名称の存在によって確かめられる。すなわち、「やまとことば」「和語」「漢語」の各名称は過去においては言語名としても使われたが（「やまとことば」と「和語」については後述、「漢語」については拙論（2018b）を参照）、今では日本の固有語ないし中国語由来の語を表すだけである。二義の区別は日本語話者の無意識裡に現に存在すると考える必要がある。

過去における言語名の意味、用法のあり方が現在と同じであったかどうかは分からないが、それでも語を表すと見られる表現を言語名と認定することには不安が残る。実際、日本語における「英語」という語の初出例は英語という言語ではなく、その語句を指していたと推定される（拙論（2018a））。

本木良永「和解例言」における「日本語」も実のところ言語ではなく日本語の語句を指していたと考えるのが自然である。そのことは、京極が挙げた例の文全体を読むだけでも確かめられる。京極の引用では省かれた文の後半を含めて示せば次の通りである。引用は長崎歴史文化博物館蔵の訳稿に基づく。

> 和蘭語ヲ日本語【もとの訳文では「日本言語」（引用者注）】ニ翻訳スルニハ各形状アル者ハ其形状ニ因リテ其名義ヲ識ルト雖トモ、其余無形ノ言語ニ至リテハ何ニ因リテカ習

[8] (58) の例の出所は吉田松陰が 1854（安政 1）年に書いた文章をその曾孫が 1886（明治 19）年に校訂出版したものであり、執筆年の用例としての信頼性に不安を残す。もし (58) を除外すれば、(57) と (59) のあいだには 74 年の時間差があり、(59) 以下の 12 例全体の時間幅は 22 年であることになる。

フ事ヲ得ンヤ。

（本木良永『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』、1792（寛政 4）年）

この言うところは、“（オランダのことば、オランダ語の語のうち）有形物を表す語はその形状によって意味を知ることができるが、無形物を表す語についてはどうやって意味を知ることができようか”ということである。「各形状アル者」における「者」は“語句”を指しており、そして、限定の連体句はそのような種類の語句の上位概念、すなわち、オランダ語のすべての語句の存在を前提としている。そのため、少なくとも現代の論理感覚で読めば、文頭の「和蘭語」と「日本語」は“オランダの語”、“日本の語”でなければならない。

したがって、「和解例言」の「日本語」が言語を指していないとは言い切れないにせよ、単純に言語名として認定することもできないことになる。当の「日本語」には読みがニホンゴかニホンコトバかという問題もあるので（4.4）、それを言語名ニホンゴの用例と見ることには語形と語義の両面に関して不透明な要素があることになる。「日本語」という言語名の初出の認定に関わる事例であるだけに、その評価には慎重を期する必要がある。[9]

なお、次は上の文に続くくだりの一部である。無形物を表す表現である数詞について、万を表す単純語がオランダ語にはなく、逆に、オランダ語の「ミリユーン」（miljoen、百万）を表す単純語が日本語にはないことを述べている。

日本ニ事物ノ名目有リテ和蘭ニ其名目コレ無キ有リ。又、和蘭ニ事物ノ名目有リテ日本ニ通ゼザル有リ。近ク仮令ヘハ、一二三ノ数ハ一言一言相当ルト雖トモ、和蘭ニ一十百千ト云フ語【「言葉」から変更（引用者注、以下同様）】有テ万ト云フ語【「言葉」から変更】無ク、万ト云フヲ和蘭語逓尹丢逸扇掇（ティーン デュ イ セン ト）【= tien duizend】ト云フナリ。此ニ十千ト正訳ス。此ノ如ク万ヲ十千ト云ヒ、十万ヲ百千ト云ヒ、百万ヲ密立猶尹（ミ リ ユー ン）ト云フナリ。日本ノ言語ニ此密立猶尹（ミ リ ユー ン）ト云フ言語コレ無シ。万ヲ百数ヲ積ミテ百万ト云フナリ。然ルニ和蘭人ハ密立猶尹（ミ リ ユー ン）ト云ヒテ百万ト云ワ（ママ）ズ、又、億兆京ト云フ語【「言葉」から変更】コレ無シ。（同上）

ここでの、現代の目で見ると混乱気味の表現の選択と一貫しない修正とから、「言語」と「語」

---

9 京極の挙例には扱いの粗いものがほかにもある。「日本語」の 5 番目に古い用例として挙げられている、

（61）日本語学は第二級より始候事（西周「文武学校基本并規則書」明治三年）

について言えば、「日本語学」は現代の理解では「日本語＋学」という語構成であろうが、明治期にあっては「日本＋語学」で、“日本の言語学”、“日本語の文法”などに近い意味を表していた（拙論（2020））。したがって、これは「日本語」という言語名の用例として無効である。

という表現の性質が現代とは異なっていたことが確かめられる。今では「言語」はゲンゴと読み、言語を表す一方、「語」はゴと読み、（複合語要素としての使用を別とすれば）単語を表すものと決まっている。しかし、過去においては「言語」はゲンゴともコトバとも読まれ、「語」はゴともコトバとも読まれ、そして、いずれも言語を表すのにも単語も表すのにも使われていた。「言語」がコトバと読まれ、語句を表している例は先に見たが、次のような例では「語（ご）」が言語を表している。

> Lezicons（ママ） in（ママ） japanese & English are most needed by foreigners in learning the Japanese language／外国ノ人ガ日本ノ語（ニツポンゴ）ヲ習フニハ和語英訳ノ字引ガ第一入用（イリヨフ）デゴザリマス。[10]
>
> （松岡章編輯『和英通語』巻之二、1872（明治 5）年）
>
> 泰西諸国ノ人他国ノ語（ご）ヲ学ブ也（や）皆自国ノ文字ヲ以テス。故ニ学ビ易シ。唯日本国（たゝにほんこく）ハ然ラズ。英語ヲ学ブニハ初（はじめ）ヨリ英書ヲ用ヒザル能ハズ。
>
> （フランシス・ブリンクリー『語学独（ひとり）案内』初編、1875（明治 8）年）
>
> 一国ノ語（ゴ）ヲ学バントセバ先其国ノ文法ヲ知ラザル可ラズ。尤モ、自分ノ生国ノ語（シヤウコクノゴ）ハ父母及ビ其他ノ人々ノ言詞（コトバ）ヲ聴テ幼稚ノ時ヨリ自然ニ記憶（オボユ）ルガ故ニ預（アラカ）ジメ別ニ文法ヲ学ブニ及バザレドモ、生長シテ後（ノチ）他国（タコク）ノ語（ゴ）ヲ学ブニハ預ジメ其文法ヲ知（シル）ヲ善（ヨシ）トス。
>
> （高橋五郎『正則対話活用自在 英米語学独案内』、1886（明治 19）年）

4.6　語史の切断と再生

猿田（1999）による 9 世紀の『行歴抄』における「日本語」の出現の指摘を単純に受け止めれば、「日本語」という名称はさして新しいものでもなく、千年以上前から日本語にあったということになる。

また、『日本国語大辞典』第 2 版第 10 巻（小学館、2001 年）の「日本語」の項目には、天台僧成尋（じょうじん）（1011 ～ 1081 年）の入宋日記『参天台五台山記』における「日本語」の用例が挙げられている。1220（承久 2）年の写本の影印[11]に基づき、前後の文脈を加えて引用する。

> 宿坊壁上懸阿閦（あしゅく）仏真言。以聖秀令取書取了。現転女身因縁為渡日本也。陳一郎来向。五度渡日本人也。善知日本語。申云、以陳詠為通事可参天台者。乍悦約束了。（宿坊の壁の上に阿閦仏真言が懸けてある。聖秀に取（はず）させ書き取った。女身に現転（うつしみ）の因縁（しだい）を日本に渡（つた）えるためである。陳一郎が来向（やってく）る。五度も日本に渡った人である。日本語を善く知っており、申（い）うには「陳詠を通事と為（し）て、

---

10 この文例は Samuel Robbins Brown *Colloquial Japanese*（1863）からの借用である。ここでの「日本ノ語（ニツポンゴ）」は原文（後掲）の「ニホン ノ コウシヨウ（ロ ア ） Nihon no koojoo」を書き改めたものである。

11『参天台五臺山記』（東洋文庫、1937 年）。

天台に参られるがよかろう」とのこと。悦んで約束をした。）[12]

（成尋『参天台五台山記』第一、延久 4（1072）年 4 月 19 日の条）

しかし、その後 19 世紀に至るまで日本語の歴史から「日本語」の名称が姿を消し、その連続性が確認できないとすれば、『行歴抄』と『参天台五台山記』の「日本語」と近現代の「日本語」を同一の語と見てよいのかということを考える必要がある。

常識的に考えれば両者は無論同一の語である。いずれも「日本」と「語」という 2 要素をその順に並べて組み立てられた複合語である。しかし、事物の“同一性”には一般に異なる側面があり得ることに注意が必要である。工業製品を例に取って言えば、同じ品番の 2 つの製品は、同一の製品ではあっても、存在としては 2 つの別物である。

筆者の考えるところでは、千年前に「日本語」の名称があったというのが事実だとしても、その「日本語」と現在の「日本語」は、同一品番の 2 つの製品のようなものである。それらが同一の設計図と材料を使って作られてはいるが相互に独立した 2 つの存在であるのと同じく、『行歴抄』と『参天台五台山記』の「日本語」と現在の「日本語」は同一の語構成の様式と同一の要素の組を使って作られてはいるが別個の存在である。千年前から現在に至るまで同一の「日本語」の名称が継承されてきたわけではない。

そのような語史の切断と再生の事例を筆者はほかに知らないが、何ら考えにくい事態ではない。「日本語」は「日本」と「語」を使って組み立てられる複合語であり、したがって、いつ誰が造語しようと「日本語」になる可能性を無理なく想定することができるからである。状況はやや異なるが、英語を表す言語名は現在日中両語で共通して「英語」であるが、おそらく各語においてそれぞれ別個に作られた（拙論（2018a））。「英吉利」と「語」を使って短い言語名を作ろうとすれば、誰が考えようと「英語」になる可能性が高い。日中共通の語はどちらか一方の言語で作られて他方に伝播したという常識的な仮定はこのような場合には成り立たない。

しかしながら、「日本語」の語史の断絶を結論とする前に、そもそも千年前の日本語に「日本語」という名称があったのかというところにさかのぼって考える必要がある。引き続きその問題を検討する。

4.7 『行歴抄』と『参天台五台山記』の「日本語」

『行歴抄』と『参天台五台山記』における「日本語」の出現を日本語史に位置付けることができるのは、当然、それが日本語の表現として使われた場合に限られる。

---

[12] 訳文は藤善訳注（2007）による。

しかし、『参天台五台山記』の「日本語」は漢文、すなわち、中国語文中に出現しており、それを直ちに日本語の表現と見なすこと――そして、日本語の辞書に載せること――には無理がある。その「日本語」は中国語における日本語の名称であった可能性があるからである。『日本国語大辞典』第２版は、

> 陳一部来向。五度渡二日本一人也。善知二日本語一。

のように返り点を加えて引用しており、あたかも『参天台五台山記』にそのように書かれているかのようであるが、古い写本に返り点はない。

他方、『行歴抄』の「日本語」は同じく漢文の文脈ではあるが地の文ではなく円載の発話中に現れるので、事情が多少異なる。そこで、問題の検討のために、まず引用の範囲を多少拡大してあらためて当該のくだりを示す。『行歴抄』には訓点が施されているが、猿田の引用ではそれが一切省かれている。[13] ここでは『行歴抄』の影印[14]に基づき、訓点のうち振り仮名と送り仮名をできるだけ原文に近い形で再現する。句読点の類の追加は筆者による。また、簡略な抄訳を添える。

> 橋南ノ松門路ノ上ヨリ 橋者寺門前橋也 有師騎馬来到。橋南頭ニシテ下馬下笠。正是留学円載井[15]也。珍便出門迎接。橋ノ北ニシテ相看、礼拝，流涙，相喜。珍雖如ト此、載不多悦。顔色黒漆ニシテ、内情不暢(ノ)ヒ。珍却(カヘ)テ念、「多奇、多奇。[16]（中略）」相共ニ帰テ院ニ、東ニ道(イ)ヒ西ニ説トモ、無有コト香味[17]。説導(イフナラク)、「我在唐国ニ已経タリ多年。総忘却日本語ヲ。」云々。

---

13 猿田は訓点を省いたと言うより、始めから訓点を見ていないものと思われる。例えば、用例冒頭付近の「来到橋南頭」を猿田は１つの句としている。すなわち、“橋の南のたもとまでやって来た”と読んでいる。しかし、『行歴抄』では「来到」の右下に句点――であると筆者には思われるもの――、「橋南頭」に送り仮名「ニシテ」が添えられている。「橋南頭」は正しくは後続の「下馬下笠」にかかり、“橋のたもとで下馬して笠を取った”という文意であろう。平安時代の和文および訓読文における、場所を表す「にして」の用法については大坪（1965）に考察がある。

訓点が円珍の日記にあったかどうかは不明である。しかし、だからと言って所与の資料から漢字の部分だけを抜き出して読んで自由に解釈すればよいということにはならないであろう。

なお、『行歴抄』の訓点は猿田のみならず従来のあらゆる翻字者がそれを無視しており（仏書刊行会編（1918）、小野校注（1982）、白・李校注（2004）、広西師範大学出版社編（2007））、訓点に合わないところに句読点が加えられた事例が多い。

14『行歴抄』（古典保存会、1934 年）。

15「井」は修行者の敬称「菩薩」の略字。

16 原文の「多ニ奇ニ」を猿田は「多々奇々」と逐字的に翻字しているが、ここでは白・李校注（2004）に従って「多奇、多奇」とした。『行歴抄』の別の箇所には「不ニ可ニ思ニ議ニ」のような表記もあり、「不可思議、不可思議」という反復を示すと考えられる。

17 白・李は「香味」を“仏教徒的気息”とし、「無有香味」を“円載講話的内容総与仏教無関（円載の話がすべて仏教と無関係である）”と説明している。本文に示した抄訳ではそれに従った。

都ヲ不語話（コトバ）セ[18]。（寺の前の道を馬に乗った円載がやって来て、橋の南のたもとで下馬して笠を取った。寺の門を出て出迎え、挨拶をして涙を流して再会を喜んだが、円載はさほどうれしく思っている風でもない。私は心中奇妙に思った。ともに寺に戻り、円載はあれこれ話したが、世俗的な話ばかりである。円載は「私はもう長年中国に住んで、日本語はすっかり忘れた」などと言った。円載は日本語を使わず、もっぱら中国語で話した。）（円珍『行歴抄』、仁寿3（853）年12月14日の条）

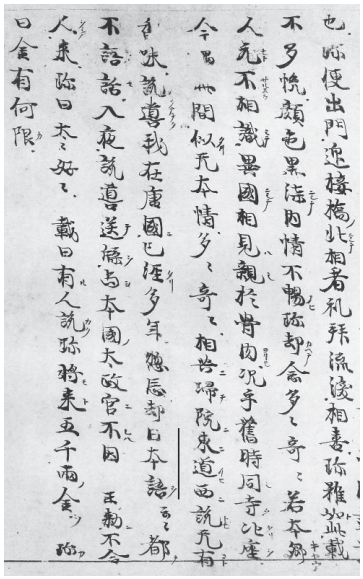

図1　円珍『行歴抄』（石山寺蔵）[19]

「日本語」はこの引用の最後の箇所、すなわち、円載が円珍に対して「我在唐国已経多年、総忘却日本語」――“私は長年中国にいて日本語はすっかり忘れた”――と語ったというくだりに現れる。猿田はこの「日本語」を直ちに円載の使った表現と考えて議論しているわけであるが、それはいささか性急に過ぎる。ここに含まれる「日本語」が誰によるどのような性質の表現だったのかということを考える必要がある。それには論理的に次の3つの可能性がある。

第1は、円載が日本語でニホンゴと言ったのをそのまま書き留めたという可能性である。

18「不語話」は読み方が不詳である。『行歴抄』の影印では「語」「話」の右にそれぞれ「コトバ」「セ」の仮名が添えられているかのようにも見えるが、「コトバ」という解読に相当する部分は一部の字画の断片が残っているに過ぎず、確かなことは言えない。白・李は「都不語話」を“完全不用日本話対答（まったく日本語を使わずに応答した）”と解釈しており、抄訳ではかりにそれに従った。白・李の解釈は翌日の日記の記述（後述）を考慮に入れたものではないかと思われる。

19 図1は前出の影印本（注14）による。

猿田はそのように考えているわけであるが、蓋然性の低い解釈であるように思われる。調査の限りではその後幕末を待たなければ「日本語」の名称が現れず、そして、日本語において「語」を後要素とする言語名は蘭学の文脈においてまず書面語で一般化し、それが後に口頭語にも進出したと推定されるからである。また、円載が日本語で話したのであれば、円珍はそれを「我在唐国已経多年、総忘却日本語」と中国語に翻訳して記録したことになるが、最後の「日本語」の部分だけが日本語による発話の通りだとする判断をいかにして正当化できるのかという問題もある。加えて、白・李校注（2004）は直後の「都不語話」を“円載は日本語を使わず、もっぱら中国語で話した”と解釈しており、実際、翌日の日記には円珍が日本から持参した伝灯大法師位の位記を渡すと円載が驚喜して日本語で話し始めた[20]という話が書かれている。もし白・李の解釈が正しければ、第1の可能性は日記のそうした展開とも齟齬を来し得ることになる。

第2は、円載が中国語で「日本語」と言った――すなわち、現代の普通話の発音で言えばRìběnyǔと言った――のを忠実に書き留めたという可能性である。少々考えにくい解釈のように思われるが、もし現にそうだったとすれば、その「日本語」は中国語の表現であり、日本語史中に位置付け得るものではないことになる。日本人の日記に書き残されたものではあるが、それは現代の日本人の中国語による留学日記に書かれた「日語」や「日本話」の名称のようなものである。

残る第3の可能性は、円載が中国語ないし日本語で「日本語」以外の何らかの言い方で表現したのを円珍が日記に書くに際して「日本語」と表現した――もしくは、抄録者が書写に際してそのように書き換えた――というものである。筆者にはこの解釈がもっとも蓋然性が高いように思われる。中国では少なくとも7世紀以後中国語を表す「華語」や「漢語」の名称が使われており（拙論（2018b））、円珍――ないし、抄録者――が「日本語」という表現を作り出せる素地はできていたと考えることに支障はない。しかし、この場合は日記が中国語で書かれている以上、「日本語」を日本語における日本語の名称と見なすことはできないことになる。第2の可能性について述べたところと共通である。

結局、『行歴抄』の「日本語」を日本語史に位置付け得るのは、第1の可能性の場合、すなわち、円載が日本語で話した場合だけであることになる。しかし、上述の通り、その可能性を事実として認定することには多重の意味で問題がある。

前節（4.6）と本節の議論を総括すれば、かりに『行歴抄』と『参天台五台山記』に記された「日本語」を日本語における日本語の名称の用例として数えることができるとしても、それは現代の「日本語」には語史的に連続しない存在であり、しかしそれ以前にむしろ、『行

---

20 原文は「従此以後、口中吐出本国言語」（これ以後は日本語が円載の口をついて出るようになった）。

歴抄』と『参天台五台山記』の「日本語」が日本語における日本語の名称だとする判断を正当化することがむずかしいということになる。「日本語」の語史に千年の断絶があったのではなく、そもそも千年前の日本語に「日本語」の名称は存在しなかった、それが筆者の推定としての結論である。

4.8　言語名の淘汰と統一

先に英語と中国語を表す言語名の歴史について考察した際、いずれの言語についても当初多様であった名称が淘汰によって統一されたことが確かめられた（拙論（2018a, 2018b））。すなわち、英語は19世紀前半の「諳厄利亜語（アンゲリア）」以後、「イギリスことば」「インゲリシくち」「インゲリシはなし」「エゲレス語」「英国語」「英語」などとさまざまに呼ばれていたのが、その後「英語」に統一された。中国語の名称は「からことば」「シナことば」「唐音」「唐話」「清語」「華語」「漢語」「支那語」「満州語」「中国語」などの名称の混在から、今ではほぼ「中国語」だけの状態に収束した。

これは、古くは言語名が必要とされる機会が少なく、定まった名称がなかったために人ごとに異なる名称を使っていたのが、言語名の使用の機会の増加とともに淘汰、統一が進んだということと理解することができる。

そして、その淘汰、統一の過程において、和語系の名称――すなわち、和語「ことば」「くち」などを後要素とする名称――が消滅し、あらゆる文脈で漢語系の名称――中でも、漢語「語」を後要素とする名称――が使われるようになった。それは、本来和語系の名称と漢語系の名称のあいだに存在した口頭語的対書面語的という役割分担の傾向が失われたということでもあった。日本語を表す名称の「日本語」への統一も、以上のような言語名の変化に関わる潮流の一部として理解することができる。

中国語における言語名にも類似の状況が認められる。多くの名称が淘汰され、「話」を後要素とする口頭語的な名称に対して「語」を後要素とする本来書面語的な名称の比重が増した。ただし、名称の合一化は日本語に比べて緩やかで、今も「英語」「英文」、「中文」「中国話」「漢語」のように複数の名称が相互間の意味差や地域差を伴って併存している。

なお、中国語における「話」から「語」への比重の移行には日本語が関与した可能性がある。[21] 日本では幕末に「～語」という形の言語名が一般化したのに対し、中国では20世紀に入ってからもまだ「～話」の形の名称が広く使われていた。日本語教科書の文例の対訳においては次のような「語」と「話」の対比の事例が一般的である。

---

[21] 拙論（2018a）では、“19世紀末以後の日本との関わりが中国における『英語』の普及、『英語』への統一を促進した可能性はあるが、調査が不十分なので明確なことを述べることができない”と述べた。ここでの本文の記述はそれを補訂するものである。

君ハ英語（エイゴ）ヲ御話シ成サル事ガ出来マスカ／君能説英国話麼
何処デ日本語（ニホンゴ）ヲ稽古シテ居ラッシヤイマスカ／是在甚麼地方用功日本話麼
（葛夢樸編『東語簡要』、1906（明治 39）年）

日本語（ニホンゴ）を御勉強（ゴベンキョー）ですか／用日本話的工麼
英語（エーゴ）を学んで居ります／学英国話来着
（文求堂編輯局編『新撰東語指南』、1917（大正 6）年）

まだ独逸語（ドイツご）や仏蘭西語（ふらんすご）や露西亜語（ろしあご）等もお出来ですか。／還会不会徳国話・法国話・俄国話甚麼的。（堀越喜博・浅井周治『日華対訳現代日本語会話文法』、1926（昭和 1）年）

5　日本語の諸名称

今までに最も多く使われてきた日本語の名称が、現在通用している「日本語」であることは確実である。そして、「日本語」の普及に先立つ長い時期において日本語の名称の首位を占めていたのは、稿末の日本語名称年表に示した用例の分布から判断して、「日本ことば」であると考えられる。

以下においては、まず時間順に「日本ことば」と「日本語」の使用状況を確認し、両名称の交替の時期と背景を考察する。その後、用例頻度の低い諸名称の使用状況について一通り述べる。

5.1 「日本ことば」

「日本ことば」の名称は従来日本語研究者の注意を引くことすらほとんどなかった。筆者の把握の限りでは、京極（1986）が「日本国のことば」「日本のことば」「日本のくち」「日本くち」などとともにその存在を指摘しているだけである。しかし、京極は、それらについて「日本語の呼称というよりも説明的言い方と見るべきものであろう」と述べるだけで、用例も挙げていない。

“呼称”対“説明的言い方”というよく分からない対比の趣旨はおそらく、慣用化した一語か必要に応じてその都度組み立てられる複合語ないし句かということであろう。そして、京極はそのような不明瞭な対比に頼ってでも、自分の着目している「国語」「邦語」「日本語」以外の雑多な表現は日本語の名称ではないということにしたかったのであろう。

しかし、「日本ことば」は日本語の歴史において用例頻度のきわめて高い複合語であり、私見ではそれを日本語の名称でないとする判断はあり得ない。「やまとことば」や、中国、朝鮮などの外国語を表す「からことば」が独立した一語と見なされるのと同じく、「日本ことば」も同様に独立した一語と考える必要がある。そして、「日本ことば」は、日本語の歴

史――正確には、その近世以後の歴史――を視野に入れた日本語辞典において優先的に記述されなければならない重要語である。[22]

京極が同じく日本語の名称から除外した「日本くち」は用例頻度が低いがやはり複合語であり、それを日本語の名称と見ても何ら不都合はない。「日本くち」は後の節であらためて取り上げる。

さて、「日本ことば」という名称の基礎になったと考えられる「日本のことば」という表現は早くは16～17世紀のキリシタン資料中に現れる。

> ヒイデスの導師としてP. F. ルイス・デ・ガラナダ編まれたる書の略。これをコンパニヤのスペリヨウレスのご才覚を以て日本(につぽん)の言葉に和す。
>
> 只この経の徳の深く高きことを云ふに、誠に海山にも越えつべし。然れば、サンタオベヂエンシヤの上より之を日本(につぽん)の言葉に和(やわら)ぐべき由仰せつけらるゝに依つて、もだし(黙し)難(がた)うして、又之を太和(やまと)言葉に翻(ひるがえ)し、板(はん)に刻むもの也。且(かつう)は是れ新しくこの国へ渡海のパアデレ、イルマン、この書のたよりを以て日本(につぽん)の言葉を習はるべき為、且はこの書の理(ことわ)りを、達して皆人弁(わきま(ママ))えん為なれば、媚びたる言葉を除き、世話に綴りて置くもの也。[23]
>
> （『キリシタン版ヒイデスの導師』、1592（文禄1）年）
>
> 日本の言葉にようコンヒサンを申す様体(ようだい)と又コンヘソルより御穿鑿(召)めさるる為の肝要なる条々のこと（日本語にて懺悔とそれを確かめ説得するための条項）[24]
>
> （コリャード『懺悔録』、1632（寛永9）年）

「日本のことば」のその後の用例には次のようなものがある。なお、「日本（の）言葉」「日本（の）詞」「日本（の）辞」という表現における「言葉」「詞」「辞」の読みは通常資料中に示されていないが、いずれも常にコトバであったと筆者は推断する。それに対し、「日本（の）語」の「語」はコトバともゴとも読めるので、読みの示されていない用例はここでの挙例の対象外とする。[25]

> 此若輩者、日本の詞にてものを申候事一切不調法に候て、物覚申事も成不申候処に、韃

---

22 従来「日本ことば」を項目として立てた日本語辞典はおそらくない。

23 引用は姉崎編著（1932）における翻字による。振り仮名における仮名遣いの不統一は原文の通りである。「日本の言葉」「大和言葉」は原本のローマ字文ではそれぞれNippon no cotoba、Yamato cotobaと書かれている。

24 引用の翻字および現代語訳は大塚翻字（1957）による。「日本の言葉」は原本のローマ字文ではNiffon no cotobaと書かれている。

25 後世の翻字に際して加えられた読みは翻字者の判断に過ぎず、当然そのまま採用することはできない。

靼大明の人々と詞をかわし埒明申事、十五人の者共一身仕候ても罷成候事にては無御座候。（中国から帰国した越前国漂民の尋問記録[26]、1646（正保3）年）

今ほどの唐人は日本のことばをつかひおぼえ、持あます銀かあるとも家質より外に借す事なし。（井原西鶴『世間胸算用』巻四、1692（元禄5）年）

ヲロシヤの青き紙の大きなる書物を二冊出したり。是は日本の詞をヲロシヤ文字にて委しく書たる書物也。それを見て日本の詞とイギリス詞とにてバラノフとヲロシヤの船頭と、重吉にいひ聞かすやうは、（後略）（池田寛親『船長日記』、1823（文政6）年）

Nihon no kotoba wo gessanu[27] *hĭto*[28], einer, der nicht Japanisch versteht, order: wer die japanische Sprache nicht versteht.

（Philipp Noack *Lehrbuch der japanischen Sprache,* 1886, Leipzig）

一語化した「日本ことば」という名称の用例は17世紀から19世紀にかけての資料中に多数見出される。その用例を、各種の記録や報告におけるものと、語学などの文脈におけるものとに分けて示す。

まず、第1の類に属する用例は非常に多く、漂流、漂着、探検に関わる内容のものが大半を占める。用例を10件示せば次の通りである。

右のばてれん共、第一天文学并諸国之口、又日本言葉も能存知候由、北京より申来候御事。（オランダ商館長の密言上申書[29]、1687（貞享4）年）

又尋候は、其方日本言葉を間々に申候、何方にて日本言葉相習候哉。異国人答申候は、（中略）日本言葉を書き候書物にて申習候[30]由、答申候事。

（渡来イタリア人司祭シドッティの尋問記録[31]、1708（宝永5）年）

旅宿逗留中、丁寧の撫育に預り、並能日本詞心得たる唐人一人有て、始終此者の世話に成り、六月廿日会安出船し、何国にも不寄、船七月十六日長崎に着船す。

（ベトナムから帰国した常陸国漂民の尋問記録[32]、1767（明和4）年）

---

26 引用は石井研堂校訂『校訂漂流奇談全集』（博文館、1900年）における翻字による。
27 ドイツ語の慣習に従ってsはザ行音の表記に用い、サ行音はssによって表記している。
28 hĭtoのĭは“無音ではないがほとんど聞こえないi”を示す。
29 林春勝・林信篤編『華夷変態』十三（1732年）所収。『華夷変態』からの引用は林春勝・林信篤編、浦廉一解説『華夷変態』上冊、下冊（東洋文庫、1958～1959年）における翻字による。
30 この「申習候」は一見「習申候」の誤記のようにも見えるが、おそらく「申習」の「申」は“話す”の意の本動詞で、全体として“話す能力を習得している”のような意味を表す。「申習候」という言い方は数件後に挙げる例にも出て来る。
31 林春勝・林信篤編『華夷変態』三十三之下（1732年）所収。
32 林復斎他編『通航一覧』巻之百七十七（1853年ごろ）所収。『通航一覧』からの引用は早川純三郎編『通航一覧』第一～第八（国書刊行会、1912～1913年）における翻字による。

右南京人は日本詞少し通じ申候に付、日本へ帰度由度々相頼候処、便次第帰し可遣旨申候間、相待罷在、右の所に凡六年程も居候様覚申候。

（ボルネオから帰国した筑前国漂民の尋問記録[33]、1771（明和 8）年）

昔より日本人此国に吹流されて来る時、厚くいたはりて妻縁をさづけ、子孫日本言葉を能云、日本事に通るを家業とす。　（工藤平助『赤蝦夷風説考』、1783（天明 3）年）

右役人に付添、罷越候者之内にヲロキセと申者有之候。（中略）日本詞にて私共へ色々咄候に付、私共一同驚入、咄も承り可申と存候処、（後略）

（薩摩国に漂着したロシア人の尋問記録[34]、1816（文化 13）年）

下役体之もの壱人上陸いたしいつ方ぇ歟参候処、無程同所下役体之唐人弐人罷越、此もの共住国相尋日本詞相分り候付、漂流之次第并船被打破候趣等申聞候処、（後略）

（中国から帰国した淡路国漂民の尋問記録[35]、1848（嘉永 1）年）

何国船に候哉相尋候処、日本詞を遣ひ候もの有之候、イキリス国官府仕出しの軍艦之趣申聞、（後略）　（英国軍艦江戸湾侵入事件の記録[36]、1849（嘉永 2）年）

以前之船え右両人私共一同乗組、最前之川筋乗参り、翌朝私共寝入居候処、五時前日本詞にて起し候間目覚見候処、船は人家有之川端え着いたし、外より通事唐人と相見壱人参り居、日本詞にて私共国所等相尋候に付、肥前伊王島并五島之もの之由申候処、（後略）

（中国から帰国した肥前国漂民の尋問記録[37]、1852（嘉永 5）年）

去申年十二月十九日爰許入津之魯西亜蒸気軍船、船名オビリッニッキ、船将名ゼリツノフと申出候て、日本詞を申習候者乗組居、諸夷には珍敷言語相通候段伝承仕、（後略）

（対馬停泊ロシア船に関する報告[38]、1861（文久 1）年）

第 2 の類に属する「日本ことば」の用例には次のようなものがある。

梵語ノ सोर[39] ヲ漢土ニ訳シテ天（テン）ト云フ。日本詞（コトバ）ニハ元ヨリ天ノコトヲそらト云フ。梵語ノ पतक（ハタキヤ）ヲ漢土ニ訳シテ幡（バン）ト云フ。日本語（コトバ）ニハ元ヨリ幡ヲはたト云フ。此類甚ダ多シ。

---

33 神沢杜口（かんざわとこう）『翁草』巻之九十（1791 年）所収。引用は日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第 3 期第 12 巻（日本随筆大成刊行会、1931 年）における翻字による。
34 石井研堂校訂『校訂漂流奇談全集』（前出）による。
35 森永種夫編『長崎奉行記録 御仕置伺集』上巻（犯科帳刊行会、1962 年）における翻字による。
36 林鶯渓他編『通航一覧続輯』巻之六十五（1856 年）所収。『通航一覧続輯』からの引用は箭内健次編『通航一覧続輯』第一巻～第八巻（清文堂出版、1968 ～ 1972 年）における翻字による。
37 林鶯渓他編『通航一覧続輯』巻之四十三（1856 年）所収。
38 東京大学史料編纂所編『大日本古文書』幕末外国関係文書之五十（東京大学史料編纂所、2005 年）所収。
39 原文における悉曇文字を印刷の都合上デーヴァナーガリー文字で代用したが、一部に問題が生じている可能性がある。

是ニ因テ見レバ和語ハ尤梵語ニ近キ歟。　（諦忍（たいにん）『以呂波問弁』、1764（明和 1）年）

我々方（われわれほう）に捷解新語と申て日本詞を習ひまする本が御座りまするが、どふでわるい処が有そふに御座るにより、其元様方（そこもとさまほう）へ遣しませふにより、御直し被下ましたらば仕合（しあわせ）まするで御座りませふ。[40]　（崔麒齢『隣語大方』巻之一、18 世紀末）

Do you speak the Japanese langage（ママ）／アナタ ニッポン コトバヲ ハナシ ナサルカ

（ウエンリイト『和英商話』、1862（文久 2）年）

いぎりす ことばは てにをはが ことばの まへに あるを もつて これを はなす（離）。にほんことばは ふるき くにことばの かたに ならひし もの なるに いぎりす ことばの かたにしたがふは いはれ なき こと なり。（英語のテニヲハは語の前にあるから離して書く。日本語は古い言語（サンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語）の型にならっているのに、英語式にテニヲハを離して書くのは謂われのないことだ。）

（ネサン ブラウン「てにをはわ ことばの あとに つづけんや」、『かなのしるべ』まきの六 ふろく、1884（明治 17）年）

わが にほんことば わ すこしも ありやんご に くわんけい ある に あらず。（中略）しかる を にほんことば わ ふるき ことば の ならわし に したがう とて、ありやんご とのみ くらべたる わ なにら の こと ぞ。（日本語は印欧語にまったく関係がない。それなのにブラウン氏が日本語を印欧語とだけ比べているのはどういうことか。）

（み、よ、[41]「ネサン ブラウン うぢ が『てにをは わ ことば の あと に つづけん や』を よみて」、『かなのしるべ』まきの七、1885（明治 18）年）

以上のように、17 ～ 19 世紀の日本語資料には「日本ことば」の名称が頻繁に現れ、それが長く日本語の最も一般的な名称であった。

5.2 「日本語」

「日本語」の名称の普及は、証拠に基づいて論じ得る限りにおいて、幕末期、19 世紀中葉に始まった。

ニホンコトバではなくニホンゴとして書かれた可能性の高い「日本語」の最も早い用例は蘭書の翻訳である『日本風俗備考』に現れる。当時刊行されることのなかった同書は、長崎出島のオランダ商館員として日本に 10 年滞在したヨハン・フレデリク・ファン・オーフェルメール・フィッセル（Johan Frederik van Overmeer Fisscher）が帰国後の 1833 年にオ

---

40 引用の翻字および漢字表記の読みは京都大学文学部国語学国文学研究室編（1963）による。「～たらば（御陰に）仕合まするで御座りませふ」という言い回しは『隣語大方』に 3 度現れる。
41「み、よ、」と記された著者は三宅米吉。

ランダで出版した日本紹介書 *Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk* を日本語に訳したものである。同書における「日本語」の出現例 8 件のうち 4 件を示せば次の通りである。

> 和蘭人は日本語を解し得べき好き時宜なく、且つ其語を習ふは固より彼国家の制禁に係れり。
> 三親相議して若し将軍の意理に合せざるときは、将軍其職を退て、子をして是を継がしむ。是を日本語に隠居と称す。
> 日本の言語の音は決して支那の声音と相似ず。日本語音は軽清にして甚た聞取り難く[42]、其口にて言ふ詞は、筆にて書く者と全く別なり。
> 故に此篇の終に日用対話を載するのみなり。然れとも有志者是に由て稍々日本語法の大意を悟る端緒を得、又動字の用格を考ふるに足り、兼て（中略）を知るに足れる事あらんか。[43]
> （フィッセル著、杉田成卿（せいけい）他訳、山路諧孝（ゆきたか）校『日本風俗備考』[44]、1847（弘化 4）年ごろ）

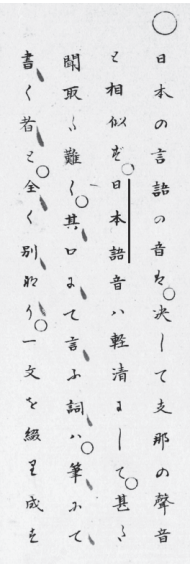
○日本の言語の音ハ決して支那の聲音と相似ず日本語音ハ軽清にして甚ふ聞取ふ難し其口ふて言ふ詞ハ筆ふて書く者と全く別ふり一文を綴る成を

図 2　フィッセル著、杉田成卿他訳『日本風俗備考』（宮内庁書陵部蔵）

---

42 使用した写本（注 44、図 2）における「聞取た難く」を訂正して引用した。
43 最後の箇所は写本では「〜を知るに足れ。事あらるんか」となっている。2 つの小さな丸をそれぞれ脱字と衍字の校正と見て、そのように訂正して引用した。
44 引用は宮内庁書陵部蔵の写本に基づく。新日本古典籍総合データベース（http://kotenseki.nijl.ac.jp/）で画像が公開されている。画像で不明の点は写本現物によって確認した。

最初の2例の「日本語」はニホンコトバとも読めるが、後の2例の「日本語音」「日本語法」はニホンゴオン、ニホンゴホウとしか読めないと思われる。[45] このことに基づいて、筆者は『日本風俗備考』における「日本語」の読みをニホンゴと推定する。

なお、『日本風俗備考』の翻訳時期は従来よく分かっておらず、大まかな想像が述べられるだけであった。[46] しかし、それは上に記した通り1847（弘化4）年ごろであったと見られる。翻訳者の1人である宇田川興斎（こうさい）が同年に翻訳の褒賞として白銀10枚を下賜されているからである。宇田川自身による『勤書』に蛮書和解（わげ）御用から受け取った通知文が次のように書写されている。

弘化四年丁未七月廿二日天文台和解御用御製美御達書写し
　銀拾枚　　松平越後守家来 宇田川興斎
日本風俗備考の蘭書和解仕骨折候に付被下之
（宇田川興斎『勤書 巻一 自弘化三年至安政元年』[47]、19世紀）

また、別の翻訳者である竹内（たけのうち）玄同も、福田編（1910）によれば、宇田川とほぼ同時期――同年同月11日――に「日本風俗備考和解の労を賞して白銀十枚を賜」っている。

推定に頼ることなく読みを確認できる「日本語」の最初の用例は、1858（安政5）年に調印された「日仏修好通商条約」の片仮名版の第21条中に「ニツポンゴ」の形で現れる。この用例の存在は清水康行氏のご教示によって知った。[48]

---

45 最後の例における「日本語法」は「日本語＋法」ではなく「日本＋語法」という語構成と見るべきものである可能性がある。これに関わる問題については拙論（2020）で論じた。

46 斎藤（1977）は「この訳書の成立は、遅くとも蕃書調所の発足した安政二年（一八五五年）ごろまでであったろう」、石山（2000）は「弘化三年（一八四六）から蕃書調所成立の安政三年（一八五六）の間と推定される」と述べている。

なお、『日本国語大辞典』第2版を始めとして、不注意にも『日本風俗備考』を原書の出版年である1833年の資料として扱っている研究が複数ある。1833年には訳者6人の半数が十代で、最年少者は12歳であった。

47 早稲田大学古典籍総合データベースで画像が公開されている。

48 日本近代語研究会2019年度春季発表大会（関西大学、2019年5月17日）で本稿の概要を披露した際に、“ニホンゴという読みが確実に分かる日本語の名称の初出例は調査の限りでは1869（明治2）年に出版されたアストンの日本語文法書におけるものだが、開国期の諸条約中に「英語」「和蘭語」「仏蘭西語」「魯西亜語」などの言語名とともに現れる「日本語」もニホンゴと読まれたのではないかと思う”と述べたところ――その時点では『日本風俗備考』の用例の存在を把握していなかった――、講演後清水氏より、「日仏修好通商条約」に片仮名版が存在し、そこに「ニツポンゴ」が含まれることをご教示いただいた。筆者にとって条約の片仮名版なるものの存在自体が知識と想像の範囲外にあったので、その後調査を進めてもこの用例に到達することはできなかったと思われる。その意味で筆者の考察にとってまことに貴重な情報であった。

第廿一条　フランスノミニストル ナラビニ コンシユルヨリ ニツポンヤクニンヘ シヨメンニテ カケアヒゴト アラバ フランスゴニテ カケアフヘシ ニツポンニテ ナニゴトモスミヤカニゲスタメニ ゴネンノ ウチハ バンジ ニツポンゴ ナラビニ フランスゴニテシタタムベシ　　（「日仏修好通商条約」片仮名版、1858（安政 5）年 10 月 9 日調印）

「日仏修好通商条約」の成立背景、版の種類――日本語の 2 版（漢字仮名交じり版、片仮名版）、フランス語版、オランダ語版の 4 つがある――、およびその内容を詳細に論じた有利（ありとし）（2018 ～ 2019）の著者である有利浩一郎氏に見せていただいたフランス外務省外交史料館蔵の同条約原本の画像を図 3 に示す。[49]

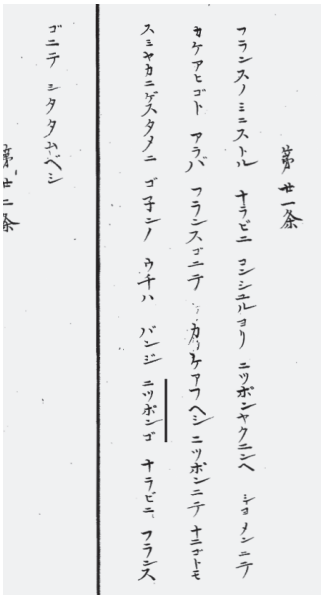
第廿一条
フランスノミニストル ナラビニ コンシユルヨリ ニツポンヤクニンヘ シヨメンニテ
カケアヒゴト アラバ フランスゴニテ カケアフヘシ ニツポンニテ ナニゴトモ
スミヤカニゲスタメニ ゴネンノ ウチハ バンジ ニツポンゴ ナラビニ フランス
ゴニテ シタタムベシ
第廿二条

図 3 「日仏修好通商条約」片仮名版（フランス外務省外交史料館蔵）

「日仏修好通商条約」片仮名版の「ニツポンゴ」から類推して、それに先行して締結された西洋各国との諸条約に現れる「日本語」も同様にニホンゴ（ないしニッポンゴ）と読まれ

---

49 日本の外務省に保存されている「日仏修好通商条約」の原本は関東大震災で罹災し、“焼失は免れたものの、本文が羊皮紙であったために凝固し、開披不可能である”と言う（外務省外交史料館（2008））。
有利（2018 ～ 2019）によれば、手写による同条約の複数の原本間には字句や表記の相違が存在し、フランス外務省外交史料館蔵の片仮名版 2 通においても同様である。ただし、有利による綿密な記述から判断して、第 21 条の「ニツポンゴ」および「フランスゴ」に関わる 2 通間の相違はないと見られる。東京帝国大学文学部史料編纂所編『大日本古文書』幕末外国関係文書之二十一（東京帝国大学、1932 年）における日本外務省蔵の条約原本の翻字――清水（2011, 2013）にも引用されている――では、第 21 条における“フランス語”の最初の出現は「フランスコ」という表記になっている。

たものと考えられる。その数例を示す。

右条約附録、エケレス語日本語に取認め、名判致し、是を蘭語に翻訳して、其書面合衆国と日本全権双方取替すもの也。

（「日米和親条約附録」[50]、1854（安政 1）年 6 月 17 日調印）

第八箇条　下田奉行はイキリス語を知らす、合衆国のエキセルレンシー・コンシユル・セネラールは日本語を知らす。故に真義は条々の蘭語訳文を用ふへし。

（「日米追加条約（下田条約）」、1857（安政 4）年 6 月 17 日調印）

第二十八条　（中略）此追加条約の本書は都合次第八個月の後為取替可申。且此仮条約書は魯西亜日本和蘭支那語を以て相記し、此条約を議定致し候者の名を記し印を調し、今之を交換し、締盟の双方堅く之を遵守し、毫頭不可有違背候事。

（「日魯追加条約」[51]、1857（安政 4）年 10 月 24 日調印）

第十四条　（中略）尤日本語英語蘭語にて本書写ともに四通を書し、其訳文は何れも同義なりといへとも、蘭語訳文を以て証拠となすへし。

（「日米修好通商条約」、1858（安政 5）年 7 月 29 日調印）

最初の 3 例においては「日本語」「イギリス語」などの「語」をコトバと読めなくもないが、最後の例の「日本語」は「英語」「蘭語」と並べられていることからほぼニホンゴでしかあり得ないように感じられる。

これらの条約に先立つ、黒船来航に関わる文書中には次のような例も見出される。

船将乗組之船え組之もの壱人、通詞壱人之外呼入不申。日本語にも通候もの乗組有之。不容易様子柄故、早々御下知無御座候ては（中略）御外聞に相成候儀は相違無御座候。先此段早々奉伺候。　（「浦賀奉行伺 米船の処置に就て」、1853（嘉永 6）年 7 月 9 日）

ポーハタンと申蒸気船え罷越、乗組候節、波荒にて漁船繋留兼候内、異人突放し候に付、其儘捨置乗船致候処、日本語を遣候異人罷出、名前申聞候様にと申候に付、（後略）

（「浦賀奉行支配組与力等上申書 吉田松陰等取調の件」、1854（安政 1）年 4 月 26 日）

兼て異人共申聞候火輪船に相違無之候に付、早速応接之もの差出、浦賀表より之書翰持

---

50 これ以後の幕末開国期の条約、文書からの引用は原則として東京帝国大学文科大学（ないし文学部）史料編纂掛（ないし史料編纂所）編『大日本古文書』幕末外国関係文書之一～二十（東京帝国大学、1910 ～ 1930 年）における翻字による。

51 この例は『法令全書 自慶応三年十月 至明治元年十二月』（内閣官報局、1887 年）の巻末に附録として添えられた各国条約書集における翻字による。東京帝国大学文学部史料編纂掛編『大日本古文書』幕末外国関係文書之十七（東京帝国大学、1914 年）所収の同条約第 28 条は言語に関する規定を欠く。

参候哉相尋候処、日本通辞三畏衛廉士ウリヤムス[52]と認候手札差出、右之もの日本語を以一通り挨拶致し、（後略）

（「松前伊豆守崇広届 米船応接の件」、1854（安政1）年5月18日）

これらの「日本語」もニホンゴであった可能性があるが、各種の漂流や漂着に関する記録に時期上重なり、文体も類似している。いずれにせよ、条約文からの類推に頼ってニホンゴの歴史をさかのぼることには限界があると考えるべきであろう。

「日仏修好通商条約」調印翌年の条約批准書交換証書の片仮名版にも「ニツポンゴ」が現れるが（有利（2018～2019））、それに次いで読みを確認できる「日本語」の用例は、その10年後に出版されたウィリアム・ジョージ・アストン（William George Aston）の日本語文法書中に見出される。代名詞について述べた第3章の関係代名詞の節に、“日本語に関係代名詞はなく、動詞を名詞の直前に置く”との説明があり、例の1つとして「日本語分からぬ人」という句が挙げられている。

A man who does not understand Japanese, *Nihon go wakaranŭ hĭto.*[53]

（William George Aston *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language,* 1869（明治2）年）

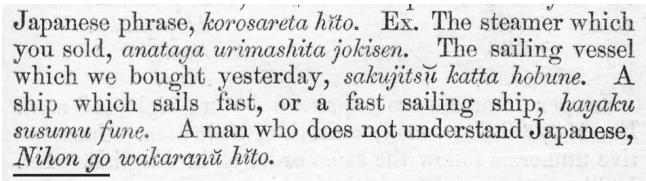
Japanese phrase, *korosareta hĭto.* Ex. The steamer which you sold, *anataga urimashita jokisen.* The sailing vessel which we bought yesterday, *sakujitsŭ katta hobune.* A ship which sails fast, or a fast sailing ship, *hayaku susumu fune.* A man who does not understand Japanese, *Nihon go wakaranŭ hĭto.*

図4　W. G. Aston *A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*（大英図書館蔵）[54]

『日本風俗備考』と条約文の「日本語」は書面語における出現であった。目下の用例は、

52 米国人入華宣教師サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（Samuel Wells Williams）。ここではその名が「三畏衛廉士」と漢字表記されているが、ウィリアムズが中国で出版した英華、華英辞典の扉での表示は「衛三畏」ないし「衛三畏廉士」である。常識的な判断としては、辞書を信頼し、日本の記録における「三畏衛廉士」を誤りと考えることになるだろうが、英語名の音訳としてはむしろ「三畏衛廉士」のほうが自然である。すなわち、「三畏」がSamuel、「衛廉士」がWilliamsを表していると単純に理解することができる。筆者は、実は「三畏衛廉士」が正しい表記で、辞書の扉における不可解な「衛三畏廉士」が誤記なのではないかと想像する。ウィリアムズが中国の人名風に姓を前に置いて短く「衛三畏」と名乗っていたことが作用して、著者名を短縮しないで書こうとした辞書の扉の製作者に混乱を来したと考えるということである。

53 ĭ、ŭは“ほとんど聞こえないくらい弱く発音されたi、u”を表す。

54 © British Library Board, General Reference Collection 12910.aa.1., 11.

表現自体からは口頭語の例とも書面語の例とも言えないが、書名と書中の他の句例に照らして、口頭語の文脈における「日本語」の出現と考えることができる。

アストンの文法書に次ぐ、読みの記された事例は次の英和辞典に見られる。

> Japanese, *adj.* 日本人（ニホンジン）ノ・日本語（ゴ）ノ
>
> （日本薩摩学生前田正穀（まさよし）・高橋良昭編『大正増補和訳英辞林』、1871（明治 4）年）

この辞書はその 2 年前に出版された『和訳英辞書』（1869（明治 2）年）――「日本薩摩学生」による序文は「改正増補和訳英辞書序」と題されている――の改訂版である。『和訳英辞書』ではこの項目は「Japanese, *adj.* 我国住人（ヂューニン）ノ。我国言葉（コトバ）ノ」と書かれており、このころに「日本語」の名称が社会に浸透していったことを示唆している。[55]

そして、この時期を過ぎると読みを確認できる「日本語」の用例が増えていくことは稿末の日本語名称年表に見る通りである。そして、「日本語」が社会に普及、定着してからは、読みが示される機会は減っていったことであろう。

「日本語」定着後の用例を示す意味は乏しいので、最後に読みの分かる比較的早い時期の用例を数件だけ挙げる。

> *Soré wa kun to iimasu. Koré wa Nihon-go dé sono ji no imi wo yakushita mon' des'.* That is called 'explanation,' and is a translation of the meaning of the character into Japanese. （Ernest Satow *Kuaiwa Hen, Twenty-Five Exercises in the Yedo Colloquial,* 1873（明治 6）年）
>
> *Nitsi-yô-bi watakoŭsi-wa Nihoñ go-wo manabi masyô, sono aké-no hi-wa sina go-wo hadzimé-masyô* «j'étudierai dimanche le japonais, le lendemain je commencerai le chinois».
>
> （Léon de Rosny *Éléments de la grammaire japonaise (langue vulgaire),* 1873, Paris）
>
> 【日本において英語は（引用者注）】実ニ学ビ難シトス。如何（いかん）トナレバ日本語（にほんご）ヲ以（もつ）テ其用法ヲ解明セシ良書ニ乏ケレバナリ。予之ヲ憂ヘ此編ヲ述テ童蒙学ビ難キノ患（うれひ）ヲ除却（のぞかん）ト欲スル耳（のみ）。　（フランシス・ブリンクリー『語学独案内』初編、1875（明治 8）年）
>
> 外国人の日本語（にほんご）を学びし人々はアナタと云詞（ことば）は対したる人を指して云ふ詞とのみ心得居（ゐ）る故に、他（ほか）【＝三人称者（引用者注）】を指してアナタと云ふは大なる非事（ひがごと）ならんと

55 もっとも、話はそれほど単純ではない。『和訳英辞書』の「我国住人」が『大正増補和訳英辞林』では「日本人」に書き換えられているが、「日本人」は少なくとも 18 世紀の資料中に見出される。日本人の名称の歴史は確かめていないので、ここでそれ以上のことは言えない。

云論を起せり。

（『七一雑報』第44号、多聞公会小信者「謬語（あやまりことば）の弁並質問」、1879（明治12）年）

You can say anything in Japanese, if you only know how. *Ii yō wo saye shitte ireba, Nihongo de nan de mo iwaremasu.*

（William Imbrie *Handbook of English-Japanese Etymology,* 1880（明治13）年）

5.3 「日本語」の名称確立の時期と背景

日本語の名称における「日本ことば」から「日本語」への交替、すなわち、「日本語」の名称の確立は、筆者の見るところでは、言語名の漢語系名称への統一というより広い現象の一部であった。

和語系の言語名から漢語系の言語名への交替の様子を用例に基づいて最もよく確かめることができるのは英語の名称である。古い時代の資料に現れる言語名の用例の多くは漢字で書かれ、その読みが分からないが、ときに振り仮名によって読みが示されたものや、仮名やローマ字で書かれたものがある。表2に、明治期中葉までの資料中に見出すことのできた、読みの分かる英語の名称を示す。交替の様子がよく分かるよう、和語系の名称と漢語系の名称を左右に分けて配置する。

表2から、和語系の名称が使われていた状態から、幕末から明治初年にかけての和語系と漢語系の名称の併用期を経て、漢語系の名称だけが使われる状態に移行した様子を確かめることができる。無論、確認できた用例は現実の使用の一部に過ぎないので、併用期はさらに長かったはずであるが、変化の全体的な型は表2に見るようなものであったと考えてよいであろう。

私見によれば、あらゆる言語の名称に関して、こうした和語系の名称から漢語系の名称への交替が幕末から明治初期にかけて生じた。『日本風俗備考』における「日本語」や「日仏修好通商条約」における「ニツポンゴ」の用例の時期も、1860（万延1）年以後におけるイギリスゴおよびエイゴという漢語系名称の出現のそれに大まかに符合している。「ドイツ語」「清国語」「支那語」などの言語名の使用開始も確認の限りにおいて19世紀中葉である。

ただし、漢語系の言語名の社会への普及開始が幕末であったにせよ、その基盤の形成は少なくとも18世紀終盤の蘭学の文脈にさかのぼる。長崎歴史文化博物館蔵の本木良永の訳稿の一部を確かめたところ[56]、そのうちの2点に読みを記した言語名が見出された。最初の『和蘭海鏡書』はオランダの航海書の翻訳である。[57]

---

[56] 桑木（1926）によれば、本木良永の翻訳は長崎に草稿ないし控えの形で123種残存している。今回調査したのはそのうち天文学を中心とする10冊で、桑木が解題を与えているものの範囲にほぼ一致する。

[57] 『和蘭海鏡書』の1か所では内題が「阿蘭陀海鏡書和解」と書かれ、それが朱筆によって「阿蘭陀万

表２　英語の名称における和語系から漢語系への移行[58]

	資料名	和語系名称	漢語系名称
1854（安政1）	村上英俊 三語便覧	英傑列語（エゲレスコトバ）	
1857（安政4）	横山保三訳 魯敏遜漂行紀略	英吉利語（イギリスコトバ）	
1859（安政6）	中浜万次郎訳 英米対話捷径	いきりすことば	
1860（万延1）	清水卯三郎 ゑんぎりしことば 福沢諭吉編訳 増訂華英通語 蕃語小引初編数量編※	ゑんぎりしことば イギリスコトバ	英語（イギリスゴ）
1862（文久2）	ウエンリイト 和英商話	インゲリシクチ，インゲリシハナシ	インゲリシゴ
1863（文久3）	Brown *Colloquial Japanese* Alcock *Dialogues in Japanese*	Ingrisz no kotoba	エゲレスゴ
1867（慶応3）	福沢諭吉 西洋旅案内 Hepburn 和英語林集成 阿部櫟斎 絵入英語箋階梯	英吉利の語（ことば）	英語（エイゴ） 英語（ゑいご）
1868（明治1）	ガラタマロ授 英蘭会話篇訳語		エイゴ
1871（明治4）	青木輔清 横文字独学 中村雄吉訳 普語箋 巻末書籍広告※	英吉利語（エギリスコトバ）	英語（エイゴ）
1872（明治5）	尺振八・須藤時一郎 傍訓英語韻礎 青木輔清訳 英会話独学 松岡章編 和英通語 島一悳訳 挿訳英吉利会話篇2 佐藤重親 英語学捷径	英吉利語（いぎりすことば） 英語（イギリスコトバ） イギリス詞（コトバ） イギリスコトバ	エイゴ イギリスゴ
1873（明治6）	松本孝輔 英和通語 Satow *Kuaiwa Hen*	English-kotoba	Yeigo
1878（明治11）	Brown *Mastery System Applied to Jap.*		eigo
1879（明治12）	津田仙他訳 英華和訳字典		エイゴ
1880（明治13）	Imbrie *Eng.-Jap. Etymology*		Yeigo
1885（明治18）	前田元敏訳 英和対訳大辞彙		英吉利語（ゴ）
1886（明治19）	Ooi *Eng.-Jap. Conversations*		Yeigo
1888（明治21）	柴田昌吉他 附音挿図増補英和字彙 Chamberlain *Colloquial Japanese*		英吉利語（ゴ） Eigo

其書ニ曰ク厄勒察亜国語（ギリシヤコクゴ）スヘーラト云フハ 此語渾天渾円ノ形象ヲ云フ語ナリ 剌的印語（ラテインゴ）ニ通シテ是ヲゴロービュストト云フ。阿蘭陀語ヲ以テ註釈セバコロートト云フ。二言此ニ球ト訳ス。　（本木良永訳『和蘭海鏡書』、1781（安永 10）年）

一　和解ノ文中ニ天学語ト記スルハ、剌徳印語（ラテインゴ）、払郎察語（フランスゴ）、諳厄利亜語（アンゲリヤゴ）、厄勒察亜語（ギリシヤゴ）、熱爾瑪尼亜語（ゼルマニヤゴ）、意太里亜語（イタリヤゴ）、亜蝋皮亜語（アラビヤゴ）、応帝亜語（インデヤゴ）、爪亜国（ジヤワコク）等ノ語ナリ。

一　和蘭語ト記スルハ、和蘭人平日俗談通用ノ語ナリ。[59]

（本木良永訳『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』、1792（寛政 4）年）

国航海鏡書」と訂正されている。

58 資料名の後ろの「※」は拙論（2018a）執筆時には当該の用例を確認できていなかったことを示す。

59 長崎歴史文化博物館蔵の訳稿では一部に虫食いによる欠字がある。不明の箇所は早稲田大学古典籍総合データベースで公開されている同訳稿の写本の画像を参考にして補った。

多くは言語ではなく語句を表す表現と見るべきものかとも考えられるが、ともあれこのように「国名＋語」という型を用いて言語名を自由に作り出せるようになっていたことが分かる。第1の例にある「厄勒察亜国語」は現代人には「厄勒察亜＋国語」という語構成のように感じられるかも知れないが、当時にあっては「厄勒察亜国＋語」であった。[60] 言語名には「梵語」や「エスペラント語」のように国名によらないものもあるので「国名＋語」という表現は実は狭すぎるが、かと言って「固有名詞＋語」などとすると指せる範囲が逆に極端に広くなってしまうので、便宜上「国名＋語」という表現に従う。

上の引用において「阿蘭陀語」「和蘭語」の読みは示されていないが、おそらく諸外国語の名称にならってオランダゴと呼ばれていたことであろう。とすれば「和解例言」の「日本語」（4.4、4.5）もニホンゴであったという推論の可能性も生じるが、当初「和蘭語ヲ日本言語ニ翻訳スル」――この「日本言語」はニホンコトバだったのではないかと思われる――と書かれていたことを思うと、単純な類推には不安が残る。本木による「和蘭語」と「日本言語」という書き分けは、外国語に対する意識と自国語である日本語に対する意識の差の反映であった――すなわち、外来の言語をオランダゴと呼ぶことはすでに定着していたが、自国語を同様の方法でニホンゴと呼ぶことはまだ始まっていなかったか、もしくは、熟していなかった――とも考え得るからである。

実際、外国語と日本語に対するそうした意識の差は明治初年の新聞に掲載された次の投書にも読み取れる可能性がある。ここでは、英語の名称は漢語系の「英語」に移行しているが、日本語は「外国のことば」との対比においてではあるが旧来の「日本のことば」によって表現されている。

> 私が或る商人の見世にて書生さんが酒を買ふ所を聞て居りますと、何か半ぶん英語をつかひますゆゑ、此人は余ほど読める人とおもひ、私もそろそろ英語で噺しかけて見ますと、いやはや見かけだほしで何もわからず、そのくせに商人を困らせるやうに剣びしといふネームのワインは有るかなどゝいつて居ましたが、此間も横はまの新聞に角力取りとスモールとの間違ひが有りましたが、外国の語をしらぬ人と知つたならやはり日本人へは日本の語で早くわかるやうに言ふが宜しうござります。
>
> （『読売新聞』1874（明治7）年12月28日、屯田三左衛門「寄書」）

結局、「国名＋語」という形の言語名の造語が18世紀末までに蘭学の書面語の文脈で一般

---

60 実際、第1の例に近い記述が本木の訳稿『天地二球用法』（1774（安永3）年）にも現れ、そこでは「厄勒察亜国ノ語」と書かれている。なお、同例の末尾の「二言此ニ球ト訳ス」の「二」が「三」の誤記であることも『天地二球用法』の記述によって確かめられる。

化し、それが19世紀中葉の幕末開国期に至って口頭語を含むより広い文脈に普及した、そして、「日本語」という名称もその後者の時期に確立した、というのが筆者の推定である。

なお、「漢語」「華語」「梵語」「蒙古語」といった言語名は古来中国語にある。そしてまた、「厄勒察亜」「払郎察」「諳厄利亜」のような音訳による国名もその大半が中国語からの借用である。とすれば、「厄勒察亜語」などの言語名も中国語からの借用であったという可能性が当然考えられる。しかし、狭い範囲の調査の限りでは、中国語に西洋の言語の名称が「国名＋語」の形で現れ始めるのは19世紀における西洋人宣教師の著作においてである。「国名＋語」以前の名称も含めて数例を示す。

> 斐録（フィロ）者何？泰西方言所謂格物窮理是也。（フィロソフィアとは何か？西洋の言語で格物窮理と呼ぶものである。）
>
> （高一志[61]訳授『斐録答彙』、1636（崇禎9）年）
>
> 獅子之名称，各国不一。極西諸国依臘第諾公通読書之音，称之謂勒阿（レオ），訳言万獣之王。（ライオンの名称は国ごとに異なるが、西洋諸国では共通書面語の“ラテン”によってレオと呼ばれ、万獣の王とされる。）
>
> （利類思[62]述『獅子説』、1678（康熙17）年）
>
> 且現在友羅巴（ヨーロッパ）列国以該両古国【＝古代ローマと古代ギリシャ（引用者注）】為上祖、則習伊之文字、其羅馬国之語、名叫拉定話、亦呼拉体納話、友羅巴士子多尚格物之学、意欲明暁万物之性、（後略）。（ヨーロッパ諸国は古代ローマと古代ギリシャを祖とし、人々はその文字、ローマ国の言語である“ラテン話”を学び、哲学を尊んで万物の性質を解明しようとしている。）
>
> （塵遊居士[63]『西遊地球聞見略伝』、1819（嘉慶24）年）
>
> 所称 Article 那一類，英語有三，即 A, an, the.（冠詞は英語には a、an、the の3つがある。）
>
> （Robert Morrison *A Grammar of the English Language*, 1823（道光3）年）
>
> 纂聖書者，始於商朝，掇拾於漢朝，筆之於希伯来兼希臘話。（聖書は中国の商朝から漢朝にかけて編纂され、“ヘブライ話”と“ギリシャ話”で書かれた。）
>
> （『東西洋考毎月統紀伝』丁酉二月、「経書」、1837（道光17）年）
>
> 葡萄亜国（中略）土音与西班亜語相同。（ポルトガルの言語はスペイン語に似る。）
>
> 路得（ルター）遂将聖書繙訳日耳曼語，令民読之，乃興崇正道。（ルターは聖書をドイツ語に翻訳して民衆に読ませ、新教を興した。）
>
> （馬礼遜（モリソン）『外国史略』、1840年代後半[64]）

61「高一志」はイタリア人カトリック宣教師 Alfonso Vagnone の中国名。

62「利類思」はイタリア人カトリック宣教師 Lodovico Buglio の中国名。

63「塵遊居士」は英国人プロテスタント宣教師ロバート・モリソン（Robert Morrison）の該書における筆名。

64『外国史略』の成書時期および「馬礼遜」の名で伝わる著者については鄒（2008）に考証がある。『外国史略』は現存しておらず、確認は魏源撰『海国図志』100巻本（1852（咸豊2）年）の巻三十八「布路亜国（ポルトガル）」、巻四十五「耶馬尼下（ドイツ）」における引用による。『海国図志』では他の文献からの引用時に表記が変更されていることがあるので、1840年代ではなく1852年の用例と見なければならない可能性も

昔上帝顕臨於世人之時, 用希伯来国語, 自称為伊羅欣(エロヒム)。（かつて神が現世に降臨するときには“ヘブライ国語”を使い、エロヒムと名乗った。）

（『遐邇貫珍』第1巻第4号、「援弁上蒼主宰称謂説」、1853（咸豊3）年）

于時有一人名梅南特爾(メナンドロス)作伝奇数種，才気高邁，而無粗豪之習，惜其書已佚。羅馬人徳論低烏斯(テレンティウス)，与之同時，喜其書，訳以臘丁 即拉体納 語，有書七種至今猶伝于世。（ローマ人のテレンティウスはメナンドロスの戯曲を好み、ラテン語に翻訳した。）

（『六合叢談』第1巻第3号、「希臘詩人略説」、1857（咸豊7）年）

したがって、「国名＋語」という型の造語法自体は中国古来のものであるが、それを世界のさまざまな言語に適用するようになったのはまず18世紀日本の蘭学者であり、次いで19世紀中国の西洋人宣教師であったと言ってよいのではないかと思われる。

5.4　その他の名称

ここでは「日本ことば」と「日本語」に比べて用例頻度の低い名称についてその使用の状況を概観する。

5.4.1　「倭語」「和語」

猿田（1999）によれば、9世紀の漢文資料に「倭語」「倭辞」「倭詞」「倭言」などの表現が現れる。現在知られている最古の例は、822（弘仁13）年成立ともされる『日本国現報善悪霊異記』上巻第二十八に現れる「倭語」である。

その後「倭」は日本語での発音の等しい「和」によっても書かれるようになる。同一の文脈で両様の表記が混用されていることも珍しくない。以下に、和文資料に現れる「倭語」「和語」と見られる用例のうち相対的に早い時期のものをいくつか挙げる。日本語の単語の意に解し得るものもある。

高麗ヲ和語ニコマト称スルニ狛(コマ)国トモ書リ。

扨、本朝ニ於テ、文筆ノ類、皆和語ヲ本トスルガ故ニ、祭文、祝詞、宣命、詔勅、告文、誄(るい)ノ類、皆以出葉書(テニハガキ)也。（中略）旧記ニ出葉トハ、縦ヘバ冬木ノ春ニ至テ出葉シテ其木ヲ知ルガ如ク、和語ヲツケテ漢字ノ意ヲ明シ知ルガ故ニ、和語ノ文字ヲ傍ニ付タルヲ出葉(テニハ)トハ云也。　（真野時綱『古今神学類編』、1696（元禄9）年）

倭語ニ末摘ム花ト云ハ紅花ナリ。

ある（拙論（2019））。

衣魚（シミ）　書ヲ食フ一名蟫（シン）二音アリ。シミトハシンノ音ヲ和訓トセシ也。和語ニ此類多シ。フミ、セニノ類ナリ。　（貝原益軒『大和本草』、1708（宝永 5）年）

少　少時ニテシバラクナリ。処ニヨリテ少ノ一字ニテモシバラクナリ。ソレハヤハリスコシト云語ナリ。和語ニテモスコシト云テシバラクノ意ニナルコトアリ。ソレト同シコトナリ。

更　（中略）深更ハ夜フケナリ。サレドモ更ノ字ハ夜ノ義ニ用ユ。フクル意ハナキヲ倭語ニフクルトヨムハ誤ナリ。　（荻生徂徠『訳文筌蹄』初編、1711（正徳 1）年）

凡万物の名并に言語其の意儀悉く解釈したがし。和語には略語多し。其の本語を知らざれば其の略語の義理弁へがたし。[65]　（伊勢貞丈（さだたけ）『安斎随筆』巻之五、18 世紀）

ただし、これらの「倭語」「和語」がすべてワゴの用例であったと断定することはできない。ヤマトコトバと読まれるものであった可能性もあるからである。文脈中に「倭名」「和訓」「和書」、「倭漢」「和漢」、「漢語」「華語」「梵語」「蛮語」といった漢語と思しき表現が現れるなどの状況証拠に頼ってワゴであろうと推定的に言えるだけである。

以上の例においては「和語」はもっぱら中国語を中心とする東アジアの言語との対比を前提として使われている。しかし、時代が下ると、「倭語」「和語」は次に見るようにあらゆる外国語との対比において日本語を指すのに使われるようになる。

物に堪（ママ）えて且つ才気ある人をお撰みあツて、一先づ彼の領地、カミシヤーツカまで遣はされ、彼の地には、和語も通ずる者ある由なれば、荒立てざるやうに対話問答し、よくよく其の情を聞糾し、さて、彼の所望も能く聞抜き、（後略）

（杉田玄白『野叟独語』、1807（文化 4）年）

If I speak to a Japanese in his own language, he is so surprised that he sometimes does not answear（ママ） me.

ワタクシ ハ アル トキ ニツポンジン ニ ワ ゴ[66] デ ハナシマシタラバ アノ ヒト ハ ヘン ニ オモツテ ヘントウ ヲ イタシマセヌ

ワシ ハ アル トキ ニツポンジン ニ トノ（ママ）[67] クニ ノ コトバ デ ハナシタラ アノ ヒト ハ ヘン ニ オモツテ ヘンジ ヲ セヌ

（Samuel Robbins Brown *Colloquial Japanese,* 1863, Shanghai）

---

65 引用は今泉定介（さだすけ）編『故実叢書 安斎随筆 自四至六』（吉川半七、1900 年）における翻字による。

66「ワ ゴ」と分かち書きし、ローマ字で書かれた日本文においても wa ngo としている。著者のブラウンが「和語」を「国名 + 語」という構成の表現として理解していたことを示唆している。

67 正しくは「ソノ」。ローマ字表記の日本文では sono になっている。

近所にメリケン、ヲンフント商人方に南京の元判と云もの有り。四ケ年程横浜に居り、和語を能く覚たり。[68]　（益頭駿次郎『欧行記』、1864（文久 4）年）

洋人和語ヲ習フニ大ニ苦ミ、邦人ノ洋語ヲ解スルガ如ク能ク語リ能ク文ヲ作ルモノ未タ嘗テ之アラズ。又洋人漢文ヲ以テ自国ノ書ヲ翻訳スルモノ多ク、洋文ヲ以テ漢書ヲ訳撰スルモノモ亦少カラズト雖トモ、未タ聞カズ、和文ヲ以テ洋書ヲ解釈シ又洋文ヲ以テ和書ヲ翻訳スルモノアルヲ。　（村田文夫『西洋聞見録 後編』巻之四、1870（明治 3）年）

倭語ノ如ク洋語モ亦無量ナレハ小冊子ニ尽スコト能ハス。脱漏ハ編ヲ重ネテ抄出スベシ。

（浮田練要・川原一石・西村周助篇輯『英仏二語便覧』、1872（明治 5）年）

Do you know English well enough to translate this book into Japanese?
コノ ホン ヲ ワコ(ママ)[69] ニ ホンヤク スル ダケ エイゴ ガ オワカリ ナサイマス カ

（Samuel Robbins Brown *Prendergast's Mastery System, Adapted to the Study of Japanese or English,* 1875（明治 8）年）

且訳字へ仮名ヲ附シ之レヲ仏音ニテ訓解スルヲ以テ、我国人ノ便利トナルノミナラズ、又外国人モ容易ニ和語ヲ解スルヲ得ベシ。

（曲木如長『仏伊和三国通語』、1876（明治 9）年）

Japanese, adj. *Nihon no;* — language, *Nihongo; Wago.*

（Ernest Mason Satow and Ishibashi Masataka *An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language,* 1876, London and Yokohama）

先年日本語ヲ換ヘテ寧(いっ)ソ英語ヲ用ヒンカ抔云ヘル説モアリテ、今モ尚ホ之ヲ説ク者カ無キテモ御座リマセヌ。（中略）私ノ説ニテハ和語ヲ英語ニ換ヘルコトハ全ク出来サル無益ノコトトシテヤメラレンコトヲ望ミマス。（中略）外国ノ書物ヲ便利ノ為ニツカフハ宜シ、又、外国語ヲ召ツカヒニスルハ宜シ、併シ其奴隷トナリテ肝腎ノ和語ヲ捨テ軽スルハ悪シト申スコトテ御座リマス。

（シー・エス・イビー[70]「日本教育ノ進否ハ日本語ノ発達如何ニ在リ」、『大日本教育会雑誌』第 68 号、1887（明治 20）年）

こうした日本語の名称としての「倭語」「和語」の用法はその後廃れた。そのため、現代人にはなじみがなく、奇異の印象さえ与えるかも知れない。しかし、「倭」の本義、すなわち、それが中国語における日本の名称であったことを考えれば、いぶかしむには足りない。日本

---

68 引用は大塚武松編『遣外使節日記纂輯』第三（日本史籍協会、1930 年）における翻字による。
69 ローマ字表記の日本文では wa-go となっている。wa と go をハイフンで隔てているのはやはりブラウンの語構成理解の反映と見られる。
70 カナダ人宣教師 Charles Samuel Eby。

語に関わりの深い外国語は長いあいだもっぱら中国語であったので、そのような事情を背景として「倭語」「和語」は意味が限定され、日本語の語のうち中国語にはないもの、すなわち、日本の固有語、やまとことばを指す用法が一般化した。しかし、実のところそれはむしろ特殊な派生義であったとも言うことができ、時代が進み西洋との関わりが増える中で日本の言語を「倭語」「和語」と呼ぶ用法が生じたのは自然な流れであった。ただ、「日本語」の名称の普及の勢いに押され、その用法は自然消滅したということであった。用例の頻度の点で、「倭語」「和語」は歴史的に見て「日本語」と「日本ことば」に次ぐ第3に重要な日本語の名称だと言ってよい。

なお、Brown *Colloquial Japanese* の例においては、“If I speak to a Japanese in his own language,” の “his own language” を敬体の日本語文では漢語系の「和語」、常体の日本語文では和語系の「その国のことば」で訳し分けており、それぞれの表現の文体的な特性を示唆している。

5.4.2 「やまとことば」

「やまとことば」も歴史が長く、意味、用法上も「倭語」「和語」に似る。すなわち、複合語の構成から言って、本来日本の言語を表し得るが、実際には中国語との対比における日本の固有語を表すのに多く使われる。

「やまとことば」の用例のうち、日本語の名称としても解し得るものを挙げれば次の通りである。いずれも西洋人による著作である。最初の例は先に「日本のことば」の初出例として挙げたものである（5.1）。

> 然れば、サンタオベヂエンシヤの上より之を日本の言葉（にっぽん）に和（やわら）ぐべき由仰せつけらるゝに依つて、もだし（黙し）難（がた）うして、又之を大和言葉（やまと）に翻（ひるがえ）し、板（はん）に刻むもの也。
>
> （『信心録 ヒイデスの経の略』、1592（文禄1）年）
>
> Yamato cotoba, ヤマト コトバ. Mot japonais, parole du Japon.
>
> （Léon Pagès *Dictionnaire japonais-français,* 1868, Paris）
>
> The Japanese language *Nippon kotoba, Yamato kotoba*
>
> （John Liggins *Conversations in English and Japanese,* New Edition, 1873（明治6）年）

次の例は日仏会話文例集の標題で、「やまとふらんす」によって両言語を表している。

> Texte Japonais 和（やまとふらんすかいわたいやく） 法 会話対訳

（Léon de Rosny *Guide de la conversation japonaise,* Seconde édition, 1867, Paris）

5.4.3 「日本くち」

「日本くち」は 17 世紀から 19 世紀にかけての資料に少数の用例を確認できただけである。「日本のくち」の用例と併せて示す。

エソポのハブラス。ラチンを和して日本（にッぽん）の口となすものなり。[71]

（『キリシタン版エソポ物語』、1593（文禄 2）年）

われらもにほんくちおひと（人毎）ことにならいやすいとゆうおまことにしたに、いかにしてもくらやみにみちおすすむやうに、ならうほとあとゑし（退る）さるやうにござて、こなたのにほんくちつかわしらるをきけは、ききしらんなからもしん（神妙）めうにこそおもいまるすれ。[72]

（康遇聖『捷解新語』第九、1676 年）

船中に日本口少にても通し申候もの有之候はゝ、出合申様にと申来候に付、（中略）右程弘玉口少通し申候に付、何国のものにて、如何の風難に逢ひ候哉と相尋申候へは、（後略）

（讃岐国漂民を日本に送還した中国人の証言の唐通事による翻訳[73]、1693（元禄 6）年）

西土の人は年々長崎に来り候て、日本口に通じ候者も有レ之。

（平田篤胤『気吹舎（いぶきのや）筆叢』上巻、成書年不詳（1814 ～ 1843 年の範囲内））

第 3 の例には「口少通し（じ）申候」とあり、引用の範囲の外には「口通し不申候」という表現もある。「くち」が現代の「ことば」と同様の感覚で使われていたことが分かる。『通航一覧』に見られる同類の表現には「詞は一向に通し不申候へとも」（巻二百十八）や「言語一円通し不申候」「一円言葉通し不申」（ともに巻二百二十一）などがあり、その「詞」「言語」「言葉」はおそらくすべてコトバであろう。

5.4.4 「日本口上（こうじょう）」

「日本口上」という言い方が使われることもあったようである。ただし、これも用例は少ない。「日本の口上」の例と併せて示す。

---

71 引用の翻字は大塚校注（1971）による。原本のローマ字文では「日本の口」は Nippon no cuchi と書かれている。

72「にほんくち」のハングルで示された読みは「니뽄구지」（ニッポンクチ）である。引用に添えた漢字表記は京都大学文学部国語学国文学研究室編（1973）による。

73 林復斎他編『通航一覧』巻之二百二十五（1853 年ごろ）所収。

其上百一代二千七十二年之間之帝王人臣不残書立申事ニテ御座候、殊ニ日本口上ノかな書ヲ唐口上ノ真文章ニ書立申事ニテ御座候ヘハ、手間ニあかせ書立不申候ヘハ、味よく参兼申候、此段御料簡被遊可被下候。

（修史事業の遅れを釈明した水戸藩彰考館の総裁2名の書状[74]、1714（正徳4）年）

Lexicons in Japanese & English are most needed by foreigners in learning the Japanese language.

ガイコク ノ ヒト ガ ニホン ノ コウシ(ママ)ヨウ ヲ ナラフ ニ ワ ワゴ ヱヤク ノ ジビキ ガ ダイイチ イリヨウ デ ゴザリマス

ガイコク ノ ヒト ガ ニツポン ノ コウジヨウ ヲ ナラウ(ママ) ニ ハ ワコ(ママ) ヱヤク ノ ジビキ ガ ダイイチ イリヨウ ダ（Samuel Robbins Brown *Colloquial Japanese,* 1863, Shanghai）

5.4.5 「日語」

中国ないし朝鮮との関わりの深い文脈での日本語文には、中国語における日本語の名称の1つである「日語」も現れる。

日語ニハ、語尾変化ヲ為ス者アリ。動詞、形容詞、助動詞、是ナリ。／日語中、有為語尾変化者。動詞、形容詞、助動詞、是也。

（松本亀次郎『言文対照漢訳日本文典』、1904（明治37）年）

明治二十八年発布の外国語学校官制に依れば外国語学校は一校内に於て数箇国語を教授するが如く思はれるが、実際は日語・漢語・英語・法語・徳語・俄語六箇国の各語学は各別に敷地校舎を有し（後略）　（京城府『京城府史』第2巻、1936（昭和11）年）

新政権成立直前から支那人の日語研究熱は素晴らしく、日語学校が各所に在る。

（福良俊之『現地報告北支経済地理』、1938（昭和13）年）

日語放送は北京、天津、済南、青島、太原に於て行はれてゐるが、他の局に於ても東京発の「ニユース」並に居留民に関係多い周知事項は華語放送に適宜挿入してゐる。

（日本放送協会編『昭和十六年ラヂオ年鑑』、1940（昭和15）年）

6　中国語における日本語の名称

中国語における日本語の名称の歴史は短い。言うまでもなくそれは、古くは中国で日本語に関心が向けられる機会が乏しかったことによる。

---

74 三浦周行（ひろゆき）「徳川光圀と其の修史事業」（『史学雑誌』第39編第7号、1928年）における引用による。

6.1　日本語の名称の歴史の概略

各時代の中国語の資料中に使用を確認できた日本語の名称の使用状況は稿末の日本語名称年表に示した通りであるが、それを大まかに整理すれば表3のようになる。「東洋」ないし「東」を前要素とする名称は、当該の時期の中国で日本が「東洋（国）」とも呼ばれていたことによる。[75]

表3　中国語における日本語の名称の歴史の概略

時期	日本語の名称
16世紀末～17世紀	倭語、倭文、倭話
上下の時期のあいだ	（日本語の名称の用例を確認できず）
1871年（日清修好条規）～20世紀前半	日本語、日本文、日本話、 日語、日文、日話、 東洋語、東洋文、東洋話、 東語、東文
20世紀後半以後	日本話、 日語、日文

おそらく通俗的な性格の強い「東洋話」の名称は表3で同時期に位置付けているほかの名称に比べて普及が多少遅いと見られる――1900年前後か――など、名称ごとに固有の事情があり得る。

以下においては、中国語における日本語の名称の歴史に関わるいくつかの問題に考察を加える。

6.2　「寄語」は日本語の名称か

16世紀の中国では倭寇対策のために日本事情が研究され、その報告が数多く出版された。そうした出版物にはしばしば「寄語」と題した中日対訳語彙集が収められている。[76]

図5は、薛俊編『重刊日本考略』（1530（嘉靖9）年）[77]巻之一における「寄語略」の開始部分である。この語彙集には誤りも目立つが、最初の「天文類」では「日」が「虚路」（ヒル）、「月」が「禿計」（ツキ）、「雨」が「挨迷」（アメ）、「霧」が「吉利」（キリ）のように対訳さ

---

75 ちなみに、中国語で書かれた旅行記である朴趾源『熱河日記』には「東語」が朝鮮語を指す名称として現れる。

76 この種の語彙集の成立背景や種類についてはつとに秋山（1933）や福島（1965）に詳細な考察がある。

77 福島（1965）によれば1523（嘉靖2）年の初刊本は現存しない。『重刊日本考略』の本文開始部などには「日本国考略」と記されており、おそらくそれが初刊本の書名だったのであろう。ただし、柱では「日本考略」とされており、状況はやや複雑である。

れている。[78]

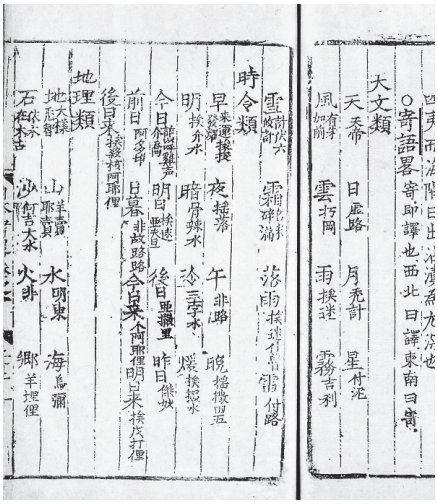

図５　薛俊編『重刊日本考略』（東洋文庫蔵）

「寄語」を題名に含む対訳語彙集は以後の複数の日本研究書にも収められている。例えば、鄭若曽編『籌海図編』（1562（嘉靖 41）年）巻之二の「倭国事略」には「寄語島名」「寄語雑類」と題した地名集と語彙集が収められている――後者は『重刊日本考略』の「寄語略」の再録――。また、鄭舜功編『日本一鑑 窮河話海』（出版年不詳、16 世紀後半）巻之五には「寄語」と題した類似の語彙集が収められている。

この「寄語」は日本語の名称なのか。もしそうであれば、表３に概略を示した日本語の名称の歴史において、「倭語」「倭文」「倭話」に先行するものとして「寄語」を位置付ける必要があることになる。

実際、「寄語」を日本語の名称とする説がある。劉（2005）は次のように述べている。

> 『日本一鑑』を含む明代の数多くの日本研究書の中では、日本語はいずれも「寄語」として記されていた。「寄」は古代の中国では「東方」の意があり、その点において、清末に言う「東文・東語」は明代の「寄語」と同じ発想に基づいた言い方であることが分かる。

78「寄語略」の最初の項目で中国語の「天」が「天帝」と対訳されているのは正常に解釈しがたく、何らかの誤りを含むものと見られる。「寄語略」全項目の対訳を詳細に検討した浜田（1951）は、ほかの項目との関係から「帝」がチを表している可能性があるとし、「従つてこゝも『天帝』をテンチとよんで『天地』の意と解すべきかとも思はれる」と述べている。「天」以外の語の対訳にも明白な誤記や読みの明らかでないものが多い。

しかし、この見解の妥当性は疑わしい。「寄語」の「寄」は『礼記』の広く知られた次の一節に由来する。

> 五方之民，言語不通，嗜欲不同。達其志，通其欲，東方曰寄，南方曰象，西方曰狄鞮，北方曰訳。（言語の通じない異民族と情意の疎通を図ることを、東方については「寄」、南方については「象」、西方については「狄鞮（てきてい）」、北方については「訳」と呼ぶ。[79]）　（『礼記』王制、前漢）

ここに見る「寄」「象」「狄鞮」「訳」は翻訳の行為ないし翻訳官を表すと理解するのが一般的であり、劉のように「寄」を東方の意に解しては『礼記』の上の一節を有意味に解釈できなくなる。また、図5に示した『重刊日本考略』の「寄語略」の見出しには「寄即訳也」云々という解説が添えられ、『日本一鑑』は『礼記』の当の一節を引用して「此【＝寄、象、狄、訳の4つ（引用者注）】皆寄語之事也」と解説している。「寄」その他を方角の意に解するとそれらの解説は“東方はすなわち北方である”などのようになって自己矛盾を来してしまう。「寄」は方角ではなく翻訳、通訳の行為――もしくは、文脈によっては翻訳官――を表すと考える必要があり、とすれば、「寄語」は言語名ではなく訳語、対訳語彙を表すと見るのが自然である。[80]

さらに言えば、朱仕玠（しかい）『小琉球漫志』（1765（乾隆30）年）――「小琉球」は台湾島を指す――の巻十には「下淡水社寄語」と題された台湾原住民の言語の語彙集が収められている。朱はそこで“薛俊の「日本寄語」の語彙分類に従って「下淡水社寄語」を編んだ”と説明しており、「寄語」が日本語の名称ではなく対訳語彙集として理解されていたことが分かる。「日本寄語」という表現は『日本一鑑』にも見られる。また、日本の資料においても、新井白石『采覧異言』（1713（正徳3）年）は、渡来イタリア人の携えていた西洋で出版された辞書を「日本ノ寄語」「此方ノ寄語」と呼んでいる。[81]

6.3 「日」を前要素とする名称の使用開始は遅かったか

表3に見る通り、19世紀後半から20世紀初頭にかけては「東」を前要素とする「東語」「東文」という名称も使われていた。

---

79 なぜ方角ごとに異なる表現が用いられたのかは不明であるが、その後方角の如何を問わず「訳」が使われるようになった。

80 秋山（1933）も「寄語とは訳語の意」であると説明している。

81 ただし、日本の資料における「寄」の使用は必ずしも方角が限定されていないように見受けられる。例えば、荻生徂徠『訳文筌蹄』初編（1711（正徳1）年）には「大抵このやうなる形容字は倭語に訳しかたし。倭語にもりんとしてやしやんとしてなど云ふやうなる形容の語亦漢語に寄しかたきかことし。」とあり、早稲田大学古典籍総合データベースで画像が公開されている古賀侗庵（どうあん）編『俄羅斯（ロシア）紀聞』第二冊（1811（文化8）年）の自筆写本には「魯西亜寄語」と題した露日対訳語彙集が収められている。

この「東」と「日」の関係について、許（2008）は次のように述べている。

> 应注意到，清代称日本，或以全称“日本（国）”，或以略称“东”，但几乎不用单个“日”字。这是因为“日”在当时并非指日本，而是“日斯巴尼亚”的略称。1889 ～ 1893 年（光绪 15 年至 19 年）出使欧美的崔国因所著的《出使美日秘国日记》，题名中的“日”就是一例。因此同文馆日语学馆如定名“日文馆”，则难免会产生歧义；如称“日本文馆”或“日本馆”，又与此前同文馆所设英、俄、法、德文馆名不统一。而将培养日语人才之所定名为“东文馆”，正可谓两者兼顾之举。

つまり、許は“清代には日本を表すには「日本（国）」か「東」を使い、「日」1 字によることはほとんどなかった、なぜならば当時の「日」は日本を指さず「日斯巴尼亜」――イスパニア、すなわち、スペイン――の略称だったからだ、1889 ～ 1893 年に中国使節として米欧に派遣された崔国因の『出使美日秘国日記』――米国・スペイン・ペルー使節日記――の書名に含まれる「日」がその一例だ、清末の外国語教育機関である同文館に設置された日本語専攻が「日文館」ではなく「東文館」と命名されたのはそのためだ”と言う。もしこの議論が正しければ、「日」の日本を表す用法の普及は早くとも 1893 年以後ということになる。

汪（2017）も次のように書いている。

> 事实上，在晚清的外交文献中，当时的“日”字并不指代“日本”，而是“日斯巴尼亚”，即“西班牙”的略称。在西班牙语中，“西班牙”一词的拼写为“España”，古时称“Hispania”，由此来看，“日斯巴尼亚”是根据西班牙的古称音译过来的词汇。另外，以“日国”指代“日斯巴尼亚”的用法可从当时崔国因所著的《出使美日秘国日记》中得到印证。因此，如果清政府将“东文馆”按照“英文馆”“俄文馆”“法文馆”“德文馆”的形式定名为“日文馆”，难免会使人产生歧义和误解。鉴于此，早于“东文馆”设立的驻日使馆“东文学堂”也未用“日文”一词来命名。

許が“清代には”としていたところを汪は“清末の外交文献では”としているが、そのほかは同じ話の反復である。

しかし、許と汪の議論は短絡的と言わざるを得ない。まず、言語に関わる一般的事実として、多義的な表現もほとんどの場合文脈に基づいて問題なく解釈されるということの認識が必要である。「日」でスペインを表している事例があるからと言って、「日」で日本を指せないということにはならない。

実際、初代駐日公使何如璋の使節日記『使東述略』（1877 ～ 1878（光緒 3 ～ 4）年）には「日

王」「日旗」「駐日」「日訳官」などの表現が見られ[82]、また、『大清徳宗景皇帝実録』[83]（大満洲帝国国務院、出版年不詳、1930 ～ 1940 年代）や北平故宮博物院編『清光緒朝中日交渉史料』（北平故宮博物院、1932 年）を確かめれば、1870 ～ 1880 年代の公的文書に日本に関わる「日国」「日人」「日政府」「駐日」「中日」「日俄（日露）」などの表現が多数見出される。さらに言えば、当時「日」で始まる国名には「日耳曼」――ジャーマン、すなわち、ドイツ――もあり、現に「日国」によってドイツを表した例がある。

言語名における「日」の使用開始も『出使美日秘国日記』よりはるかに早い。「日語」の相対的に早い時期の用例は台湾事情を解説した丁紹儀『東瀛（えい）識略』に現れ、その出版は 1873（同治 12）年である。

> 又按明薛俊日本寄語称天曰帝，地曰智，日曰虚路，月曰禿計，父曰爺，母曰発，数之一曰丟，二曰咀。台民固無此語。府志及朱仕玠漫志所記諸番土語則称天為務臨，地為奈、為烏吻，日為易阿、為咿嚦哈，月為咿達、為務難，父為攬麦、為阿兼，母為頼臘、為児嚦，数之一為打、為塞圧，二為利撒、為労労呷，亦与日語不類。此可徴日人与台実風馬牛不相及也。（薛俊の「寄語略」によれば日本語では天を「帝」[84]、地をチ、日をヒル、月をツキ（中略）と言うが、台湾にこのような語はない。『台湾府志』と朱仕玠『小琉球漫志』に記された台湾固有語では天を「務臨」、地を「奈」「烏吻」、日を「易阿」「咿哈」（中略）と呼び、日本語とはまったく異なる。）
>
> （丁紹儀『東瀛識略』巻六「番社」、1873（同治 12）年）

他方、「東～」の形の名称の初出は確認の限りにおいて 1884（光緒 10）年である。次に示す第 1 の例は中日対訳語彙集の一部で、「東語」は書名にのみ現れる。

> 東洋言語　逆本苛托（ニホン コト）
> 西番言語　一斤生苛托（イジンサン コト）
> 中国言語　南京生苛托（ナンキンサン コト）　（玉燕『東語簡要』、1884（光緒 10）年）[85]

---

82 確認は沈雲竜編『近代中国史料叢刊』第 59 輯（文海出版社、1970 年）所収の手書き稿本――亜茶山人なる人物による序と跋がある――の影印による。『走向世界叢書』（湖南人民出版社、1983 年）および鍾叔河編『走向世界叢書』第 2 版（岳麓書社、2008 年）――著者の遺族による 1935（民国 24）年の自費出版本（筆者未見）を底本としている――に収められた翻字とは一部字句上の不一致がある。本文にはすべてに共通して現れる語例を挙げた。

83「徳宗景皇帝」は光緒帝。

84 この「帝」という対訳は、『重刊日本考略』の「寄語略」における「天帝」という対訳と同じく、何らかの誤りを含むと見られる。『籌海図編』は『重刊日本考略』に従って「天帝」と訳すが、『全浙兵制日本風土記』は「所頼」、『日本一鑑 窮河話海』は「梭剌」などと訳しており、いずれもソラであろう。

85 ニホンコト、イジンサンコト、ナンキンサンコトの読みは大友・木村編（1972）の翻字に添えられた解釈による。

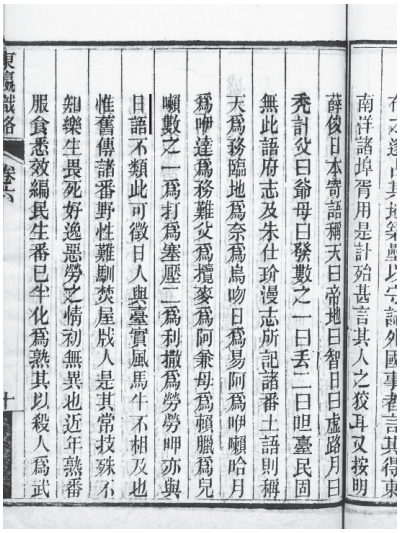

図 6　丁紹儀『東瀛識略』（東京大学東洋文化研究所蔵）

前因使署理署需用東文繙訳、奏請招致学生設館肄習以三年為期、仰蒙俞允。（在日公使館での日本語翻訳の必要から公使館への東文学堂設置を奏上して許可を得た。）

（「総理各国事務衙門奏遵議在日所招東文学生畢業後応如何待遇片」[86]、1884（光緒 10）年）

用例の初出年は新たな用例の発見によって見直しが必要になるが、いずれにせよ「日～」の名称は少なくとも『出使美日秘国日記』の出版より 20 年早い 1870 年代から使われていたということであり、そして、その使用が『東瀛識略』の 1 例にとどまらないことも稿末の日本語名称年表に見る通りである。許と汪の議論は、「東文館」の命名根拠の推定としては正しい要素を含む可能性があるが、その論拠として述べられている「日」の用法の歴史は事実に合致しない。

6.4　名称の使い分け

中国語では、各時代に多数の日本語の名称が併用されてきた。その使い分けの根拠に満足な説明を与えることはむずかしいが、ある程度言えることはある。

まず、中国語における日本語の名称の後要素には「語」「文」「話」の 3 つがある。このうち、中国語や英語を表す言語名との関係から考えても、「～語」の形の名称は書面語的な性

なお、福島（1968）によれば、『東語簡要』は翁海村『吾妻鏡補』（1814（嘉慶 19）年）に収められた「国語解」を参考にし、それに加除を行うことによって編まれた。

86 北平故宮博物院編『清光緒朝中日交渉史料』（北平故宮博物院、1932 年）所収。

格が強かったと考えられる（拙論（2018a, 2018b））。そして、字義上、「～文」は書きことば、「～話」は話しことばを指すのが本来的な用法であったであろう。しかし、現代においては「説日文（日本語を話す）」「説中文（中国語を話す）」のような表現も一般化しており、後部要素の意味や役割分担に変化が生じたものと解釈される。

19 世紀から 20 世紀にかけて併用されていた「日本～」「日～」「東洋～」「東～」の名称の使い分けの根拠は残念ながら詳らかではない。この問題は「日」その他で始まる言語名以外の複合語のことも併せて考える必要があるが、短い文章中に「日国」と「東国」が混在し、その使い分けに理由を見出しがたいといった事例もあり、単純明快な説明を与えることはおそらく望めない。1 点だけ言えるのは、日本語学習書は書名や序文には「東語」や「東文」の名称を用いていても、会話文例にはもっぱら次のように「日本話」を用いているということである。

アナタハ日本語（ニホンゴ）ヲ話サレマスカ／你能説日本話否

（唐宝鍔・戢翼翬（しゅうよくき）『東語正規』、1900（明治 33）年）

もっとも、時代が多少下ると「東洋話」という名称も普及するので、名称の使い分けは単純に前要素と後要素に分けて考えることのできない複合的な、しかも、時間的に変化する現象であったと考えられる。

現代における「日語」「日文」「日本話」という 3 名称の使い分けも地域差その他の要因に依存していると見られるが、これも未解決の問題として残さざるを得ない。

6.5　名称の淘汰

表 3 に示した名称はいずれも前要素「倭」「日本」「日」「東洋」「東」と後要素「語」「文」「話」を組み合わせたものであった。その組合せの有無の状況を整理すると表 4 のようになる。今も広く使用されている名称を「◎」、過去にあったが今では廃れた、あるいは、使用が少ない名称を「○」で示している。

表 4　日本語の名称を構成する前要素と後要素の組合せ

	−語	−文	−話
倭−	○	○	○
日本−	○	○	◎
日−	◎	◎	○
東洋−	○	○	○
東−	○	○	

過去には上記の前要素と後要素のほとんどすべての組合せがあったわけであるが、中国語、英語を表す名称の場合と同じく、その多くが淘汰された。

まず、日本を指す古来の名称「倭」およびそれを前要素とする言語名はすべて廃れた。日本人への配慮として「倭」の貶義を避けたということが考えられるが、貶義の内容や発生時期が不明で、確実なことは言えない。

また、「東洋（国）」という国名とともに「東洋」「東」を前要素とする言語名も廃れた。その原因も不詳であるが、日本人の使う「日本（国）」「日本語」という国名、言語名に合わせるようになったということかも知れない。もしそうだとすれば、中国語での名称を日本語でのそれに一致させる形になったという意味において、日本語から中国語への語彙的影響の一例であったことになる。

7　おわりに

日本語の名称の歴史という重要でありながら研究の先例の乏しい問題に一通りの考察を加えてみた。「日本語」という名称は19世紀中葉以後に普及したいわゆる近代新語の一つであった。

ここでは日本語がどのような範囲の言語を指すのかということは明確にせず、冒頭で“現在「日本語」と呼ばれる言語”と同語反復的に説明するにとどめた。それは、本稿での議論にはその規定で十分だと考えたということであり、原理的にそれでよいということではない。何かの名称について論じるのであれば、本来その何かの実体の範囲をまず明らかにすることが不可欠のはずである。

将来の調査と考察を通じて、日本語の名称の歴史に関する我々の理解がさらに正確なものとなることを期待したい。

文献

秋山謙蔵（1933）「明代に於ける支那人の日本語研究」『国語と国文学』第10巻第1号

姉崎正治編著（1932）『切支丹宗教文学』（同文館）

有利（ありとし）浩一郎（2018～2019）「日仏修好通商条約、その内容とフランス側文献から見た交渉経過（1）～（10）」『ファイナンス』第54巻第3～12号（財務省）

石山洋（2000）「日蘭修好四百年と書物（12）フィツ（ママ）セル『日本風俗備考』」『日本古書通信』第65巻第12号

板沢武雄（1941）「江戸時代に於ける地動説の展開と其の反動」『史学雑誌』52巻1号

大塚光信翻字（1957）『コリャード懺悔録』（風間書房）

大塚光信校注（1971）『キリシタン版エソポ物語 付古活字本伊曽保物語』（角川書店）

大坪併治（1965）「『にして』と『において』」『島根大学論集（人文科学）』第 14 号

大友信一・木村晟編（1972）『吾妻鏡補所載 海外奇談国語解 本文と索引』（小林印刷株式会社出版部）

小野勝年（1982）『入唐求法行歴の研究 上 智証大師円珍篇』（法蔵館）

外務省外交史料館（2008）「『安政の五カ国条約』一五〇周年」『外交史料館報』第 22 号（外務省外交史料館）

片桐一男（1985）『阿蘭陀通詞の研究』（吉川弘文館）

かめいたかし（1970）「《『こくご』とはいかなることばなりや》―ささやかなるつゆばらいのこころをこめて―」『国語と国文学』第 47 巻第 10 号

京極興一（おきかず）（1986）「『国語』『邦語』『日本語』について―近世から明治前期に至る―」『国語学』第 146 集

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1963）『隣語大方』（京都大学国文学会）

京都大学文学部国語学国文学研究室編（1973）『三本対照 捷解新語 釈文・索引・解題篇』（京都大学国文学会）

桑木彧雄（あやお）（1926）「本木仁太夫良永の事蹟―長崎の阿蘭陀通詞、地動説の我国最初の解説者―」『科学知識』第 6 巻第 11 号、同 12 号（科学知識普及会）

斎藤毅（つよし）（1977）『明治のことば―東から西への架け橋―』（講談社）

猿田知之（1999）「日本列島言語の呼称をめぐって―九世紀を中心に―」『日本文学論叢』第 24 号（茨城キリスト教短期大学日本文学会）

清水康行（2011）「誰が言語を司るのか―幕末外交における正文と通訳をめぐって―」『文学』第 12 巻第 3 号（岩波書店）

清水康行（2013）『黒船来航 日本語が動く』（岩波書店）

総合仏教大辞典編集委員会編（1987）『総合仏教大辞典』（法蔵館）

田野村忠温（2018a）「言語名『英語』の確立」『東アジア文化交渉研究』第 11 号（関西大学大学院東アジア文化研究科）

田野村忠温（2018b）「中国語を表す言語名の諸相―その多様性、淘汰と変質、用法差―」『待兼山論叢』第 52 号文化動態論篇（大阪大学大学院文学研究科）

田野村忠温（2019）「言語研究資料としての近代中国地理文献彙集の信頼性―『海国図志』と『小方壺斎輿地叢鈔』―」『或問』第 36 号

田野村忠温（2020）「『日本語学』とその関連語―意味と構造の変容―」『国語語彙史の研究 三十九』（和泉書院）

野本覚成（かくじょう）（1986）「行歴抄」金岡秀友（しゅうゆう）他編『日本仏教典籍大事典』（雄山閣出版株式会社）

橋本進吉（1933）「石山寺蔵行歴抄解説」『行歴抄』（古典保存会）

浜田敦（1951）「日本寄語解読試案」『人文研究』第 2 巻第 1 号（大阪市立大学文学会）［加筆版が京都

大学文学部国語学国文学研究室編『日本寄語の研究』（京都大学国文学会、1965 年）に収められている。］

福島邦道（1965）「日本考略・日本図纂解題」京都大学文学部国語学国文学研究室編『日本寄語の研究』（京都大学国文学会）

福田源三郎編（1910）『越前人物志』中巻（玉雪堂）

藤善真澄訳注（2007）『参天台五台山記 上』（関西大学出版部）

仏書刊行会編（1918）『大日本仏教全書』第二十八冊 智証大師全集第四（仏書刊行会）

古田東朔（1969）「『国語』という語」『解釈』第 15 巻第 7 号

古田東朔（1994）「国語意識の発生」『日本語論』第 2 巻第 6 号

古田東朔（1998）「コクゴ？ クニコトバ？」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』（汲古書院）

馬淵和夫（1957）『日本韻学史の研究Ⅰ』（日本学術振興会）

箭内健次（1988）「通航一覧」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第 9 巻（吉川弘文館）

劉建雲（2005）『中国人の日本語学習史―清末の東文学堂―』（学術出版会）

白化文・李鼎霞校注（2004）『行歴抄校注』（花山文藝出版社）

广西师范大学出版社编（2007）『入唐求法巡礼行记』（广西师范大学出版社）

汪帅东（2017）「晚清日语译才培养机构研究—京师同文馆之东文馆新考」『日语学习与研究』2017 年第 1 期

许海华（2008）「近代中国日语教育之发端—同文馆东文馆」『日语学习与研究』2008 年第 1 期

邹振环（2008）「《外国史略》及其作者问题新探」『中山大学学报（社会科学版）』第 48 巻第 5 期

謝辞　清水康行氏より、日仏修好通商条約に片仮名版があり、そこに「ニツポンゴ」の名称が現れるという、本稿にとってきわめて重要な事実をご教示いただいた。また、有利浩一郎氏（財務省）にお願いして、フランス外務省外交史料館蔵の同条約原本の画像を見せていただいた。ここに記してお二方のご厚意に深甚の謝意を表したい。

日本語名称年表

(A) 日本語における名称

	資料名	日本語の名称
822(弘仁13)?	[日本国現報善悪霊異記 上28※	倭語(漢文中の使用)]
845(会昌5)	[円仁 入唐求法巡礼行記4※	日本国語(漢文中の使用)]
853(仁寿3)	[円珍 行歴抄※	日本語(漢文中の使用)]【漢文初出】
9世紀	[惟宗直本 令集解7,32※	倭詞, 倭辞[, 漢語](漢文中の使用)]
936(承平6)	[矢田部公望撰 日本書紀承平六年私記※	倭言, 倭語[, 仮名, 和漢之字, 倭国, 日本, 日本国](漢文中の使用)]
1072(延久4)	[成尋 参天台五台山記1※	日本語(漢文中の使用)]
12世紀	橘忠兼編 色葉字類抄(黒川本)※	和言 ヤマコトハ(ママ)
1220(承久2)?	慈円 愚管抄2 (1835(天保6)年写本)	倭詞, やまとことは
1283(弘安6)	無住道暁編 沙石集5	和国の詞
1339(延元4)?	北畠親房 神皇正統記※	やまとことば[, もろこしの詞]
1445(文安2)	行誉 壒嚢鈔4※	和語, 大和詞
15世紀	尭憲 和歌深秘抄	和国のことは
1548(天文17)	運歩色葉集	倭語(ワコ)
1592 (文禄1)	キリシタン版ヒイデスの導師※	Nippon no cotoba, Yamato Cotoba
1593 (文禄2)	キリシタン版平家物語 キリシタン版エソポ物語	Nihon no cotoba Nihon no cotoba, Nippon no cuchi
1610(慶長15)?	太平雑記 (東京帝国大学編 大日本史料12-7(1905)所収)	日本の言語
1618(元和4)	[池田好運編 元和航海記	倭詞(漢文中の使用)]
1632(寛永9)	コリャード 懺悔録	Niffon no cotoba
1646(正保3)	越前国鞴鞀漂民口書 (石井研堂校訂 漂流奇談全集(1900)所収)	日本の詞
1676(延宝4)	康遇聖 捷解新語9	にほんくち(니뽄구지(ニッポンクチ))
1687(貞享4)	おらんだかぴたん密言上書 (林春勝他 華夷変態13(1732)所収)	日本言葉
1692(元禄5)	井原西鶴 世間胸算用4	日本のことば
1693(元禄6)	讃岐国唐国漂民記 (林復斎他編 通航一覧225(1853頃)所収)	日本口
1696(元禄9)	真野時綱 古今神学類編1,47他 大和言葉(やまとことは) (歌語辞典)	国語, 和語[, 梵語] やまとことは
1700(元禄13)	貝原益軒 日本釈名1	和語[, 唐音, 梵語]
1704(元禄17)	江原某 長崎虫眼鏡2	日本ことば
1708(宝永5)	渡来羅媽人口書, 関係書状 (林春勝他 華夷変態33(1732)所収) 貝原益軒 大和本草	日本口, 日本言葉, 日本詞[, 南蛮口] 倭語, 和語
1713(正徳3)	新井白石 采覧異言	東語, 我語(ワガコトバ?)[, 日本寄語]
1715(正徳5)	新井白石 西洋紀聞1 荻生徂徠 訳文筌蹄初編	我国のことは 倭語, 和語[, 漢語]
1716(正徳6)	真野時縄編 本朝学原浪華鈔3	倭語
1719(享保4)	西川如見 町人嚢底払 下	和語, 倭語, 日本の語[, 唐土の語]
1720(享保5)	西川如見 長崎夜話草 蓮二房 新撰大和詞	日本の詞 大和詞、和語[, 和漢之詞]
1727(享保12)	[荻生徂徠 徂徠先生学説	倭言(漢文中の使用)]
1728(享保13)	太宰春台 倭読要領	倭語, 日本ノ人ノ言語[, 漢語, 華語, 中華ノ人ノ言語, 高麗(カウライ)の語]
1737(元文2)	香月牛山 国字医叢1	日本ノ言語, 我国ノ言語, 本邦ノ言語
1738(元文3)	荻生徂徠 訓訳示蒙1	日本ノ語, 日本ノ詞, 日本詞, 和語, 倭語[, 唐人語(コトバ), 唐人ノ語, 唐土ノ詞]
1751(宝暦1)	陸奥国唐国漂民口書 (外国通覧巻之上(成書年不詳)所収)	日本言葉
1752(宝暦2)	永代節用大全無尽蔵	和語
1754(宝暦4)	漂着唐船荷抜御仕置伺 (森永種夫編 長崎奉行御仕置伺集(1962)所収)	日本言葉
1758(宝暦8)?	建部綾足 折々草	倭語
1759(宝暦9)	志摩国台湾漂民口書 (林復斎他編 通航一覧215(1853頃)所収)	日本の言葉[, 南京の言葉]
1760(宝暦10)	田辺茂啓編 長崎実録大成10 唐通事事始之事	日本詞
1761(宝暦11)	鳥居清満画 丈阿作 倭詞元宗談(やまとことばげんそうものがたり)	倭詞(やまとことば)
1762(宝暦12)	越前国唐国漂民口書 (林復斎他編 通航一覧229(1853頃)所収)	日本辞

1764（宝暦14）	諦忍 伊呂波問弁 ［柴野栗山 雑字類編（確認は1786年の重修版所収の序による）	日本詞（コトバ），日本語（コトバ） 国語［，国字，漢語］（漢文中の使用）］
1767（明和4）	安南船ヨリ外国漂着之者七人送来事（長崎志12（1760）所収） 常陸国安南漂民口書（林復斎他編 通航一覧177（1853頃）所収） 陸奥国安南漂民口書（石井研堂校訂 漂流奇談全集（1900）所収） 薩摩国唐国漂民口書（同上）	日本詞 日本の言 日本言葉，日本語 日本詞
1771（明和8）	筑前国ボルネオ漂民口書（神沢杜口 翁草（1791）所収）	日本詞
1773（安永2）?	建部綾足 本朝水滸伝前編7，後編46	日本言，大倭言［，漢言］
1774（安永3）	薩摩国唐国漂民口書（石井研堂校訂 漂流奇談全集（1900）所収）	日本詞
1775（安永4）	陸奥国唐国漂民口書（林復斎他編 通航一覧206（1853頃）所収）	日本詞
1781（天明1）	藤貞幹 衝口発	本邦ノ言語，和語［，秦人ノ言語，韓語，竺語］
1783（天明3）	工藤平助 赤蝦夷風説考 大槻玄沢 蘭学階梯1	日本ことば，日本言葉 和語［，蘭語，漢語］
1786（天明6）?	赤人（ロシア人）之説（青島俊蔵他 蝦夷拾遺別巻（1800頃?）所収）	国語，和語
1787（天明7）	端隆編 葛原詩話4	和語
1789（寛政1）	朽木昌綱 泰西輿地図説4	日本語，和語
1790（寛政2）	陸奥国唐国漂民口書（石井研堂校訂 漂流奇談全集（1900）所収） 最上徳内 蝦夷草紙2,3 森嶋中良 琉球談 本居宣長 古事記伝	日本詞 日本詞，日本の言葉［，蝦夷詞，蝦夷の言，蝦夷言語］ 日本語［，琉球語］ 皇国の言，皇国の雅言（ミヤビゴト），皇国ノ語［，漢語（カラコト，カラコトバ），異国（アダシクニ）の語］
1792（寛政4）	本木良永 星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記※	日本語［，和蘭語］
1797（寛政9）	北海紀聞 英船東蝦夷来航事件（大友喜作編 北門叢書3（1972）所収）	日本詞
18世紀後半	伊勢貞丈 安斎随筆5 青島俊蔵他 蝦夷拾遺 崔麒齢 隣語大方	和語，日本の言語 和語 日本詞
1804（文化1）	天草渡来ロシア人尋問記録（林復斎他編 通航一覧275（1853頃）所収） 中尾猷祖撰 雷公薬性解	書簡三通和文オロシヤ満洲語［，ヲロシヤ言葉］ 国辞
1807（文化4）	大槻玄沢 環海異聞 羽太正養 休明光記8 杉田玄白 野叟独語※	日本詞 日本詞 和語
1810（文化7）	奥平昌高・馬場佐十郎・神谷源内 蘭語訳撰	国語［，蘭語，漢語］
1813（文化10）?	平田篤胤 伊吹於呂志	御国の語（コトバ）［，オランダ語（コトバ），蘭語，漢語（カラコトバ），戎語（カラコトバ），天竺語（コトバ）］
1815（文化12）	杉田玄白 蘭学事始	和語［，蘭語］
1816（文化13）	鳥海松亭 音韻啓蒙 薩摩国魯国漂民口書（石井研堂校訂 漂流奇談全集（1900）所収） 吉雄権之助他訳 道訳法児馬 緒言	日本詞 日本詞 皇和の語，皇国の言語
1820（文政3）	青木興勝 南海紀聞3	日本語
1823（文政6）	池田寛親 船長（フナヲサ）日記	日本の詞［，イギリス詞］
1825（文政8）	ゴローニン著 馬場佐十郎他訳 遭厄日本紀事	日本詞，日本語
1832（天保3）	豊後国唐国漂民口書（林復斎他編 通航一覧続輯42（1856）所収） 日宣 神代評撰記	日本詞 日本ノ語（コトハ）
1833（天保4）	ドゥーフ・ハルマ蘭和辞典	皇国の言語［，和蘭の語，和蘭語，払郎察語］
1837（天保8）	宇田川榕菴 舎密開宗16	邦語
19世紀前半	平田篤胤 気吹舎筆叢 上	日本口，我が国語
1846（弘化3）	松平大隅守帰国願（林鵞渓他編 通航一覧続輯64（1856）所収）	和語
1847（弘化4）?	フィッセル著 杉田成卿他訳 山路諧孝校 日本風俗備考	**日本語**【初出】，日本言語，日本の言語［，西語，和蘭語，蘭語，波爾杜瓦爾語］
1848（嘉永1）	島抜唐国漂流御仕置伺（森永種夫編 長崎奉行御仕置伺集（1962）所収）	日本詞
1849（嘉永2）	英軍艦江戸湾侵入事件（林鵞渓他編 通航一覧続輯65（1856）所収）	日本詞，日本語
1851（嘉永4）	川本幸民 気海観瀾広義1	国語［，漢文］
1852（嘉永5）	肥前国唐国漂民口書（林鵞渓他編 通航一覧続輯43（1856）所収） 紀伊国魯国漂民口書（林鵞渓他編 通航一覧続輯98（1856）所収）	日本詞，日本之詞 日本語，日本の語

1853(嘉永6)	浦賀奉行伺 米船の処置に就て (幕末外国関係文書1(1910)所収)	日本語
1854(安政1)	摂津国米国漂民口書 (林鶯渓他編 通航一覧続輯116(1856)所収) 吉田松陰 回顧録 三月廿七夜記※ (出版は1886年) 浦賀奉行等上申書 吉田松陰(4/26) (幕末外国関係文書5(1914)所収) 松前伊豆守崇広届 米船応接(5/18) (幕末外国関係文書6(1914)所収) 日米和親条約附録(6/17)	日本語 日本語[, 漢語] 日本語 日本語 **日本語**
1856(安政3)	Rosny *Introduction à l'étude de la langue japonaise* 村上英俊 五方通語	**日本語**考(日本語書名) 国語[, 仏蘭西語, 英傑列斯語, 和蘭語]
1857(安政4)	日米追加条約(下田条約)(6/17) 日蘭追加条約(10/16) 日魯追加条約(10/24)	**日本語**[, エゲレス語, 蘭語] **日本語** 魯西亜**日本**和蘭支那**語**
1858(安政5)	日米修好通商条約(7/29) 日魯修好通商条約(8/7) 日英修好通商条約(8/26) 日仏修好通商条約(10/9) 日仏修好通商条約 片仮名版(10/9) 高橋重威選 和蘭文典字類 後編	**日本語**[, 英語, 蘭語] **日本語**[, 魯西亜語] **日本**英吉利及和蘭**語** **日本語**[, 仏蘭西語, 和蘭陀語] **ニツポンゴ**【読み初出】[, フランスゴ, オランダゴ] 国語[, 国字(カナ)]
1859(安政6)	日仏修好通商条約批准書交換証書 片仮名版(9/22)	**ニツポンゴ**[, フランスブン, ヲランダブン]
1860(安政7)	小原竹堂校 商貼外和通韻便宝 倫敦新聞紙抄訳 日本使節華盛頓ニ着スル説	**日本語** **日本語**[, 支那語, 英語]
1861(文久1)	対馬滞泊露艦問情記録 (幕末外国関係文書50(2005)所収)	日本詞
1862(文久2)	ウエンリイト 和英商話 洋書調所訳 官版海外新聞別集 日本使節巡行紀事 淵辺徳蔵 欧行日記	ニッポンコトバ* **日本語**[, 英吉利語, 和蘭語] **日本語**[, インジーヤ語, 印度語, 英語]
1863(文久3)	神奈川別段新聞紙 文久3/7/13 鹿児島の戦争 Brown *Colloquial Japanese*	**日本語**[, 和蘭語, 英語] Nippon no kotoba*, Wa ngo*, Nippon no koojoo*, Nihon no koojoo*
1864(元治1)	益頭駿次郎 欧行記	**日本語**, 和語[, 英語]
1866(慶応1)	森有礼 航魯紀行※	**日本語**, 和語
1867(慶応2)	ヘボン 和英語林集成 Lowder *Conversations in Japanese and English,* Part 1 [Rosny *Guide de la conversation japonaise,* 2ed.	Nippon no kotoba*, Nippon kotoba* Nipon(ママ) no kotoba* 和法(やまとふらんす)会話対訳]
1868(明治1)	Pagès *Dictionnaire japonais-français*	Yamato cotoba ヤマトコトバ, Wago ワゴ
1869(明治2)	Aston *A Short Grammar of Spoken Japanese* 高橋新吉・前田献吉・前田正名編 改正増補和訳英辞書	Nihon go*【口頭語初出】 我国言葉(コトバ)ノ(Japanese *adj.*の訳語)
1870(明治3)	村田文夫 西洋聞見録後編4※ 日本外国商人独通詞	和語 日本詞
1871(明治4)	Aston *A Short Grammar of Spoken Japanese,* 2ed. 日清修好条規 前田正穀・高橋良昭編 大正増補和訳英辞林 内田晋斎編 浅解英和辞林 横浜毎日新聞254 広告	Nihon go*, Nihon no kotoba* 日本文[, 漢文](条約中国語文中の名称と共通) **日本語**(ゴ)ノ(Japanese *adj.*の訳語) 邦語[, 漢語] **日本語**
1872(明治5)	松岡章編輯 和英通語 浮田練要・川原一石・西村周助篇輯 英仏二語便覧 ダラス著 吉尾和一訳 英音論 後藤達三編述 訓蒙窮理問答1	日本言葉(ヤマトコトバ), 日本(ニツポン)ノ語(ゴ) 倭語[, 洋語, 英仏二語] 和語, **日本語**[, 英語] 日本(につぽん)の言葉(ことば)
1873(明治6)	Satow *Kuaiwa Hen* Baba *An Elementary Grammar of Japanese* Liggins *Conversations in English and Japanese,* new ed. Rosny *Éléments de la grammaire japonaise* 永田方正 北海小文典 文部省年報1 柴田昌吉・子安峻編 附音挿図英和字彙	Nihon no kotoba*, Nihon-go* Nipon(ママ) no kotoba Nippon kotoba*, Yamato kotoba* nippoñ-no kotoba*, Nippoñ go*, Nihoñ go* 国語 日本の国語, **日本語** **日本語**(ゴ)(Japanese *n.*の訳語)
1874(明治7)	明六雑誌1 西周 洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論 洋々社談2 黒川真頼 言語文字改革ノ説ノ弁 Evrard *Cours de langue japonaise en soixante leçons* 読売新聞12/28 投書	和語, 国語, **日本語**会[, 漢語, 英語, 仏語] 皇国ノ言語[, 西洋ノ言語] nipponno cotoba* 日本(につぽん)の語(ことば)
1875(明治8)	Brown *The Mastery System Applied to Jap. or Eng.* ブリンクリ 語学独案内初編 文部省年報1 明治6年	wago* **日本語**(にほんご)[, 英語(えいご)] **日本語**[, 国語, 日本ノ国語, 人民普通の国語]
1876(明治9)	中根淑 日本文典 上 洋々社談19 大槻文彦 日本「ジャパン」正訛ノ弁 曲木如長 仏伊和三国通語 Satow, Ishibashi *An Eng.-Jap. Dic. of the Spoken Language*	吾ガ国ノ言語, 日本ノ言語, **日本語** **日本語** 和語 Nihongo, Wago

1877(明治10)	堀秀成 言霊妙用論 上	皇国言，和語
1878(明治11)	中根淑 日本文典字類 堀秀成 日本語学問答 朝野新聞10/20 金剛艦乗組の士官に聞き得たる一二の雑話※ クラセ著 太政官翻訳係訳述 日本西教史 沢畠頼母編 大日本語学軌範 初篇 音声学	**日本語** **日本語** **日本語** 日本人ノ言語，**日本語**[，葡国語，葡萄牙語] 日本の言辞，日本言辞
1879(明治12)	チャムブレン 英語変格一覧 歌舞伎新報29 雑報 七一雑報44 投書 東京学士会院雑誌1-3 神田孝平 邦語ヲ以テ教授スル大学校	**日本語** **日本語** **日本語**(にほんご) 邦語
1880(明治13)	福沢諭吉 学問のすすめ 太政官翻訳係訳述 日本西教史 下 Imbrie *Handbook of English-Japanese Etymology*	**日本語** **日本語** Nihongo*
1881(明治14)	在仏公使井上外務卿あて書簡12/23（日本外交文書14(1951)所収）	国文，欧文
1882(明治15)	日宣 神代評撰記2 肥塚貴正編 蝦夷風俗彙纂前編6 東洋学芸雑誌7 矢田部良吉 羅馬字ヲ以テ日本語ヲ綴ルノ説	日本ノ語(コトハ) 日本の言語，日本詞*[，蝦夷言，蝦夷言葉*] **日本語**[，我国語，英語，仏語，支那語]
1883(明治16)	山本嘉六 大日本語学	大日本語(ヲオヤマトコトハ)，神国言葉(ワカクニコトハ)
1884(明治17)	かなのしるべ6 ふろく 玉燕 東語簡要	にほんことば 逆本苛托(ニホンコト)(「東洋言語」の訳語)
1885(明治18)	円山達音 悉曇妙契音訓日本詞解 坪内逍遙 小説神髄 市川義夫 英和和英字彙大全	日本詞 倭言葉(やまとことば) 和語，**日本語**[，英語]
1886(明治19)	Noack *Lehrbuch der Japanischen Sprache* 高橋五郎 英米語学独案内 坪内逍遥 諷誡京わらんべ※ 末松謙澄 日本文章論 北畠道龍師 天竺行路次所見3 東京学士会院雑誌8-3 学問弁	Nihon no kotoba* **日本語**(ゴ) **日本語**(にほんご)[，国言葉，英語(ゑいご，いぎりすご)] **日本語**[，支那語] **日本語** **日本語**
1887(明治20)	森貞次郎 山田長政暹羅偉蹟 内田虎之助 明治英和会話大全 イビー 速成英語階梯 初編	**日本語**(**につぽんご**，**にほんご**，にほんことば) 和語，**日本語** **日本語**(ニホンゴ)
1888(明治21)	Chamberlain *A Handbook of Colloquial Japanese* 女学雑誌136 将来の和歌	Nihon-go* 大和詞(やまとことば)
1889(明治22)	大槻文彦 言海(～1891)	**日本語**，大和語(やまとことば)，和語
1890(明治23)	岡倉由三郎 日本語学一斑 三上参次 日本文学史 下	**日本語** 大和詞
1891(明治24)	佐藤寛 日本語学新論 高津鍬三郎 日本中文典	**日本語** **日本語**[，支那語，仏蘭西語，英国語，仏国語]
1892(明治25)	松本仁吉 日本孝子美談 家庭教育 山田美妙 日本大辞書	**日本語**(にほんご)，英語(えいご) **日本語**[，英国語，英語，漢語]
1893(明治26)	高橋五郎 排偽哲学論	**日本語**
1894(明治27)	ガローウニン著 海軍司令部訳述 露艦艦長日本幽囚実記	日本詞，**日本語**[，露語，満洲語]
1895(明治28)	上田万年 国語研究に就て 台湾総督府民政局学務部 日本語教授書	**日本語**，国語，大和言葉 **日本語**(ニホンゴ)*[，英語]
1896(明治29)	MacCauley *An Introductory Course in Japanese*	**ニホンゴ**
1897(明治30)	大槻文彦 広日本文典大槻文彦 広日本文典 東京朝日新聞2/21 清国日本語教師を聘す	日本ノ言語，日本国語 **日本語**(にほんご)学校，**日本語**教師
1898(明治31)	岡本柳之助編 日魯交渉北海道史稿 山上万次郎編述 新撰大地誌 前編1 琉球教育26 芝山美談	日本詞，**日本語** **日本語** 倭言
1899(明治32)	内村鑑三 外国語の研究	**日本語**[，欧羅巴語，欧州語，英語，独逸語]
1900(明治33)	岡沢鉦次郎 初等日本文典 清水安次郎編 露和英会話	**日本語**[，支那語，漢語，英語，露語] **日本語**[，露語，英語]
1901(明治34)	松下大三郎 日本俗語文典 前波仲尾 日本語典 石川倉次 はなしことばのきそく	**日本語**[，支那語，英語] 国語 くにことば
1902(明治35)	落合直文 国書辞典	大和語(やまとことば)
1903(明治36)	巌谷小波 小波洋行土産 上	**日本語**(にほんご)[，独逸語(ドイツゴ)]
1904(明治37)	松本亀次郎 言文対照漢訳日本文典	日語(ニチゴ)
1905(明治38)	上田万年・福井久蔵 続新日本文典	**日本語**，国語[，朝鮮語，英語，独逸語]
1906(明治39)	鍾美堂編輯部編 英語之誤	**日本語**，国語[，英語]

1907(明治40)	岡沢鉦次郎 新式日本文典原理 福井久蔵 日本文法史 羅馬字ひろめ会編 国字問題論集	**日本語** **日本語** **日本語**
1908(明治41)	山田孝雄 日本文法論 三矢重松 高等日本文法 保科孝一 国語学史	国語，我が国語[，支那語，英独諸国語] **日本語** **日本語**，国語[，朝鮮語]
1909(明治42)	ブリンクリ著 伊藤博文・菊池大麓序 新語学独案内	**日本語**，国語[，英語]
1910(明治43)	後藤朝太郎 文字の研究	古代**日本語**，現代**日本語**[，梵語，巴利語，支那語，朝鮮語]
1911(明治44)	河野常吉編 北海道旧土人	和語[，アイヌ語]
1912(大正1)	スウィート著 金田一京助訳 新言語学	**日本語**[，支那語，英語，仏蘭西語]
1913(大正2)	日下部重太郎 現代の国語	大和言葉，やまと言葉，和語
1926(昭和1)	大阪絵具染料同業組合編 染料読本	倭詞[，漢語]
1928(昭和3)	明石国助 日本染織史	倭言葉
1934(昭和9)	松本亀次郎 訳解日語肯綮大全	**日本語**(ニッポンゴ)，日語(ニチゴ)
1935(昭和10)	徳富猪一郎 蘇峰自伝	**日本語**，現代の日本言葉(にほんことば)
1936(昭和11)	京城府 京城府史2	日語
1938(昭和13)	福良俊之 現地報告北支経済地理	日語
1940(昭和15)	日本放送協会編 昭和16年ラヂオ年鑑	**日本語**，日語
1943(昭和18)	週刊ニツポンゴ(マニラシンブンシヤ)	**ニツポンゴ**，**日本語**(ニッポンゴ)

(B) 中国語における名称

	資料名	日本語の名称
15～16世紀	[日本館訳語	日本語の名称なし]
1530(嘉靖9)	[薛俊編 重刊日本考略1	寄語]
1561(嘉靖40)	[鄭若曽撰 重鐫日本図纂	寄語]
1562(嘉靖41)	[鄭若曽撰 籌海図編2	寄語]
1592(万暦20)?	[侯継高撰 全浙兵制 日本風土記1	寄語]
1597(万暦25)	郭光復編 倭情考略	倭語
16世紀後半	[鄭舜功編 日本一鑑 窮河話海4,5,7	日本寄語，寄語，寄音，倭字，倭音，華文]
1621 (天啓1)	馮夢竜編 喩世明言	倭話
17世紀前半	周清原 西湖二集17	倭話
1871(同治10)	中日修好条規 李鴻章 日本議約完竣折	日本文[，漢文](条約日本語文中の名称と共通) 倭文[，漢文]
1872(同治11)	申報9/5 日本郡主下嫁	日本語言文字
1873(同治12)	丁紹儀 東瀛識略6	**日語**【初出】[，諸番土語]
1874(同治13)	[申報8/8 訳録日国領事堂判	日国(=ドイツ)，日耳曼]
1875(光緒1)	申報11/17 続述遭風遇救事	日本語
1876(光緒2)	申報1/7 日本賽会 申報6/7 李圭 東行日記	日本語 **日文**【初出】[，華文，西文]
1877(光緒3)	[申報12/6,7 古巴華工条款	日文(=スペイン語)，漢文，法文，大日斯巴呢啞国，大日国(=スペイン)]
1878(光緒4)	[何如璋等奏請在日本横浜等処分設理事官摺	東学翻訳，西学翻訳，日本文字]
1879(光緒5)	黄遵憲 宮島誠一郎との筆談(王宝平(2005)における引用による)	和文和語学校
1880(光緒6)	申報1/7 琉効日言	日本語言文字
1881(光緒7)	申報7/22 新設日本書塾(広告)	日本語言文字
1882(光緒8)	(中国公使館に東文学堂が開設される)	
1884(光緒10)	総理各国事務衙門奏遵議在日所招東文学生畢業後応如何待遇片 玉燕 東語簡要 申報5/19 朝鮮近聞 金玉均 甲申日録(朝鮮資料)	東文翻訳 東語，東洋言語(訳語はニホンコト)*[，中国言語，華語(ともに訳語はナンキンサンコト)*，西番言語，英語(ともに訳語はイジンサンコト)*] **日語** **日語**
1885(光緒11)	申報9/4 7月17日京報全録 申報10/25 日人無理	東文 **日語**

1886(光緒12)	申報8/27 長崎肇事細情	東語
1887(光緒13)	黄遵憲編 日本国志32,33	日本語，日本方言，日本之語言，日本語言，日本之語，和語
1889(光緒15)	傅雲竜 游歴日本図経20上 張之洞 勧学篇 下	日本国語[，日本国人，日本国音，日本国字] 東洋文[，西語，西文]
1890(光緒16)	申報3/28 2月27日京報全録 出使日本国大臣黎庶昌跪奏～	東語
1893(光緒19)	黄慶澄 東游日記	東文，和言[，漢文，華語，英文，西文]
1894(光緒20)	甲午戦争電報録	倭語
1895(光緒21)	馬関議和中日談話録 李鴻章 中日議和紀略 陳天麒 東語入門	東文[，華文，英文] 東文，東語[，華文，英文] 東語
1896(光緒22)	時務報3～ 東文報訳(日本人による翻訳記事) 司香旧尉 海上塵天影 李春生 東遊六十四日随筆 台湾総督府民政局学務部 新日本語言集 甲号	東文，日本語[，華文] 東洋話 日東言語 日本語言，**日本話***【初出】
1897(光緒23)	梁啓超 致康有為書 時務報27,29,33 梁啓超 変法通議 論学校 訳書 (京師同文館、広東同文館に東文学館が増設される) 申報6/11 蘇州日本租界章程	倭文[，漢文] **日文**，和文[，華文，華語，西文，西語] 日本文
1898(光緒24)	林百川・林学源編 樹杞林志 金国璞・平岩道知 北京官話談論新篇	**日語** 日本国語学堂，東語学堂，東語館
1899(光緒25)	清議報10 梁啓超 論学日本文之益 清議報10 横浜近事 大同学校開校記 清議報24 各埠近事 記横浜華商会会議所開会事※ 東華申報11/11 学生近況 申報9/22 俄営新埠	日本語，日本文 日本語[，華語，英語，英文] **日語** **日語**[，日華学堂，英語，徳語] 東洋語
1900(光緒26)	梁啓超(沈翔雲編輯印行) 和文漢読法 唐寶鍔・戢翼翬 東語正規 宮島大八 支那語独習書 東華申報6/20 学成致用	和文，東文，日本文，**日文**[，漢文] 東語，東文，倭文，日本語*(訳語)[，華語，漢文] 東文 **日語**
1901(光緒27)	東華新報4/3 議和随員名単 申報6/27 書籍広告	東文[，英文，法文，徳文，俄文] 東洋話(無師自通東洋話)
1902(光緒28)	新民叢報9 梁啓超 東籍月旦 泰東同文局編 東語初階 王鴻年 日本語言文字指南 陶珉編 和文奇字解 新民叢報4 紹介新著 和文奇字解	東語，東文[，英語，英文，西語，西文」 東語 日本語言，日本語文，日本文，**日本話*** 和文 和文，日本文，**日文**，**日語**[，西文]
1903(光緒29)	郭祖培・熊金寿 日語独習書 関庚麟 日本学校図論※	日本語，**日語**，**日本説***(おそらく日本話の誤り) **日語**
1904(光緒30)	司香旧尉 海上塵天影 西島良爾 対訳日清会話六十日間卒業 増補版 張廷彦 支那語動字用法 東方雑誌1-1,5,7 各省学堂類誌，日本法政速成科規則他	東洋話 **日語**，**日本話***[，清語，中国話*，英国話*] 東語学堂 ，日本文 東文，日本語
1905(光緒31)	黄尊三 留学日記 楊学泗 初歩清語教科書 大矢透著 鐘賡言校 日本文典課本 繍像小説28,31,32 文明小史32,35,36 東方雑誌2-4 出使日本大臣楊奏特設法政速成科摺片	**日語**，日本文，**日文**[，英文] **日本話***[，中国話*，英国話*] **日文**，日話，**日語***[，華文，華話] 東洋話[，中国話，外国話] 東語，東文，**日語**，**日文**
1906(光緒32)	新智社編輯局編 実用東語完璧 金太仁 東語集成 葛夢樸編 東語簡要 張毓霊 東語異同弁 文求堂編輯局編 日語全璧 陶珉編 和文奇字解	東語，日本語，**日語**，**日本話*** 東語，日本語，**日本話*** 東語，**日語**，**日本話*** **日語**，日本国語，**日本話*** **日語**，**日本話*** 日本文，**日文**，**日語**
1907(光緒33)	馮紫珊編 仮名付東文奇字解 文求堂編輯局編 東語自得指掌 又名日本語独案内 井上翠著 松雲程校閲 東語会話大成 施呼本・果清阿編 日語宝典 申報10/6 滑稽小説支那旅行	東文 東語，日本語，**日本話*** 東語，**日語**，**日本話*** **日語** **日本話**[，英文，英語，英国話]
1908(光緒34)	作新社 東中大辞典 顔恵慶 英華大辞典	東文，東語，**日語**[，中語，西語，英語，徳語] 日本言語[，中国話，華語，英語，徳語，法人之語言]
1909(宣統1)	但燾 海外叢稿4※	**日語**
1910(宣統2)	但燾 日語古微	**日語**

1911(宣統3)	連雅堂 劍花室詩集 外集1(1895～1911年の期間における作品)	**日語**
1915(民国4)	彭文祖 盲人瞎馬之新名詞	**日語**, **日文**
1917(民国6)	徐珂編 清稗類鈔8 文求堂編 新撰東語指南	日本語 東語, **日本話***
1918(民国7)	新青年5-5 呉敬恒 補救中国文字之方法若何？	日本語
1924(民国13)	東方雑誌21-5 魯彦 狗	**日本話**
1925(民国14)	東方雑誌22-7 郭沫若 行路難	**日本話**
1928(民国17)	東方雑誌25-4 張資平 緑黴火腿	**日本話**, 日本文, **日文**
1934(民国23)	長尾宗次 支那語教科書 第三学年用	**日本話**[, 中国話]
1935(民国24)	王玉泉 最新実用日語会話大全 李仲剛 現代華語指南1,2 周作人 関於日本語, 市河先生他(周作人 苦竹雑記(1936)所収) 申報3/9 業余信箱 関於手頭字的討論	**日語**, **日本話***[, 徳国話*] **日語**, **日本話*** 日本語, **日本話**, 日本文, **日文** 東洋文
1936(民国25)	王統照 游離	東洋話
1939(民国28)	張源祥 支那語の会話	**日本話***[, 中国話*]
1942(民国31)	茅盾 劫後拾遺	東洋話

凡例・注

1) この年表は20世紀中葉までの日中各語における日本語の名称の出現状況を示す。「国語」「邦語」などの語についても多少示す。併せて、関連語の出現などを [ ] に入れて示す。
2) 漢字表記に振り仮名などの形で添えられた読みは ( ) に入れて小字で示す。
3) 日本語における日本語の名称のうち読みがニホンゴであることが分かる、または、比較的確実にそのように推定されるものはゴシック体で示す。中国語における名称については「日語」「日文」「日本話」をゴシック体とする。
4) 名称のうち口頭語の文脈で用いられたものには「*」を付して示す。
5) 資料名は記入スペースの制約上必要に応じて調整して示す。
6) 資料名の後ろに付した「※」は当該の用例が過去の研究ですでに指摘 されていることを示す。
7) 用例は可能な限り現物ないしその影印によって確認したが、それができないものは翻刻テキストによった。翻刻者によって加えられた読みは採用しない。

The History of Names for the Japanese Language

Tadaharu TANOMURA

The history of names for the Japanese language has escaped the attention of most researchers of the language to date. Japanese is unhesitatingly referred to by authors as *Nihon-go* regardless of the period of time under discussion, as if it were a name invariant throughout history. The language name *Nihon-go*, however, is actually considerably new. As far as we may ascertain based on attested instances, language names consisting of a country name and the noun *go,* denoting word or language, started to be used productively by translators of Dutch by the end of the eighteenth century, and spread to society in the middle of the nineteenth century, when Japan opened itself to the rest of the world after more than two centuries of self-imposed national isolation. The first solid instance of *Nihon-go* appears, in the form of *Nippon-go,* in the *Katakana* version of *The Treaty of Amity and Commerce between Japan and France,* which was signed in 1858.

For centuries preceding the middle of the nineteenth century, Japanese was referred to by a variety of names, the most frequent of which was *Nihon-kotoba,* where *kotoba* is a noun denoting word or language. The alternation of the names from *Nihon-kotoba* to *Nihon-go* was arguably a specific case of the general change which occurred to language names in the nineteenth century, i.e., the alternation from names with the native (*Wago*) noun *kotoba* to names with the Sino-Japanese (*Kango*) noun *go*. The English language, for instance, was called *Igirisu-kotoba* prior to the change, but was replaced by the names *Igirisu-go* and *Ei-go,* the former of which went extinct afterwards.

At the end of the article, the history of Chinese names for Japanese will be examined and discussed briefly. In Chinese, names used in older times such as *Wo-yu, Dong-wen* and *Dongyang-hua* disappeared as a result of mutual selection, leaving *Ri-yu, Ri-wen* and *Riben-hua* as the three most frequent names in Chinese-speaking societies today.

Keywords: language name, the Japanese language, *Nihon-go, Nihon-kotoba*